

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Creation of the Tai Dam Scripts in Vietnam

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009611

ベトナムにおける黒タイ文字の創成について

檜 永 真佐夫*

Creation of the Tai Dam Scripts in Vietnam

Masao Kashinaga

ベトナムのタイ語系民族ターイは固有の伝統文字をもつ。しかし、地域集団によってその書体は異なっていたため、1950年代のベトナムでは少数民族の文化伝統を保護する政策の一環で書体を統一し、新しい「ターイ文字」がつくられた。その際、基準となったのは、黒タイというサブグループの間にある統一性の高い文字「黒タイ文字」であった。本論文の目的は、黒タイ文字がつけられた歴史的経緯とそのプロセスの詳細を示すことである。そこで本論では、まずフランスのパヴィ使節団が蒐集した白タイ（ターイの別の地方集団）の現地文字資料と、同時期の黒タイの書簡を分析し、1890年代の白タイ語、黒タイ語の表記システムを示す。そのうえで、黒タイ首領カム・オアイが先導した20世紀初頭の文化運動に焦点を当てる。そこからフランス植民地政権の「分割統治」で助長された白タイと黒タイの対立関係を背景として黒タイの文化的独自性が追求されその一環で黒タイ文字の原形がつけられたこと、1910年代にその文字による文書が黒タイの間で広まったことを明らかにする。

The Thai, Tai-speaking people and an official ethnic category in Vietnam, have transmitted their own scripts. Furthermore, every local group of Thai people has also developed its own scripts. Therefore, attempts were made by Vietnamese ethnologists in the 1950s to unify all local scripts of Thai to produce official ‘Thai scripts’ under an ethnic policy of protecting the inherent ethnic cultures. At that time, they referred to highly unified scripts used among the Tai Dam, a local group of Thai people. The purpose of this article is to present details of historical processes associated with the creation of the ‘Tai Dam scripts’.

* 国立民族学博物館

Key Words : Tai Dam (Black Ta), Tai Don (White Tai), French Colonialism, Mission Pavie, local texts

キーワード : 黒タイ, 白タイ, フランス植民地主義, パヴィ使節団, 現地文書

This article first presents the Tai Dam and the Tai Don (a different local group of the Thai people) writing systems of the 1890s by analyzing a letter written by Cam Oai, the Tai Dam chief, and by analyzing three handwritten texts collected by the Mission Pavie. Subsequently, this report particularly describes cultural movements led by him at the beginning of the 20th century, creation of the archetype of the Tai Dam scripts, and the spread of the texts written by the archetype among the Tai Dam. Based on the background of political antagonism between the Tai Dam and the Tai Don encouraged by the so-called ‘divide and rule’ policy of the French colonialism, the 1910s can be demonstrated as a time of pursuit of cultural originality of the Tai Dam.

1 はじめに	10 年代記に描かれたカム・オアイ
2 ターイの中の黒タイ	11 19世紀後半のライチャウ—抗仏から親仏へ
3 トゥアンザオにおけるターイ文字 (1890年)	12 ライチャウ首領家族拉致事件 (1886年)
4 カム・オアイによる書簡 (1894年)	13 カム・オアイによる文化運動 (20世紀初頭)
5 枚山知州カム・オアイ	14 20世紀初頭のムオン・ムアットの文字
6 バヴィ史料中の白タイ文書	15 黒タイ文化の確立
7 連続記法から分かち書きへ	16 むすび
8 シップソンチャウタイにおける文書主義	
9 1890年代のムオン・ムアット首領一族の写真	

1 はじめに

黒タイ文字 (*xư Tãy Dăm, chữ Thái Đen*) は、タイ語系言語を話す黒タイが継承してきた古クメール系文字である。黒タイ (*Tãy Dăm*) という集団の文化的特徴については次節で詳述することにして、まずは「黒タイ」という集団名を初めて耳にした人が必ず知りたがる次のことのみ説明しておこう。

ベトナムで黒タイはターイ (*Thái*) という民族の地方集団として分類されている。黒タイとは、白タイ (*Tãy Đón* または *Tãy Khao*) など文化的に近似する近隣

集団と区別するための自称であるが、その区別に黒、白という色彩名称を用いる理由については民族学者、歴史学者のあいだで定説がない。本論文で検討するのはこの黒タイによる文字の固有性についてである。

黒タイの間で広まっていた比較的統一性の高い字体が「黒タイ文字 (*xư Tầy Đăm, chử Thái Đen*)」とよばれたのは、20世紀半ばのことである。1950年代にベトナムの民族政策の一環で、西北部に広く分布するターイが自分たちのことばを表記するために継承してきた多種多様な字体を統一し、「ターイ文字 (*xư Tầy, chử Thái*)」という字体がつけられた。その際、基準となったのが黒タイのあいだで広く用いられていた統一性の高い文字群であった。これらが黒タイ文字と呼ばれ、その子音字、母音符号のすべてがターイ文字のなかに取り込まれた。

しかし黒タイの間で継承されてきた19世紀末の文書の中には、さまざまな字体が確認でき、その表記法はかならずしも一定していない。黒タイ文字の知識のみに基づき容易に解読できる文書は、むしろ少ない。では黒タイの間で、いつごろ、どのようにその統一性の高い字体が作られ広まったのだろうか。

この問題にアプローチするために筆者が注目したのが、パヴィ使節団 (*Mission Pavie*) による現地収集資料 (1879–1895年) である。それはフランス外務省クールヌーヴ古文書館 (*Centre des Archives diplomatiques de La Courneuve*, 以下 CADC と略記) に収蔵されている。そのなかには東南アジア大陸部各地のタイ系民族それぞれが固有の伝統文字で記した文書も含まれている。現ベトナムライチャウ (*Lai Châu*) 省を中心とする白タイの支配階層に属する者が記した文書も数件あり、黒タイ文字に直接的に関係する資料としてはディエンビエン (*Điện Biên*) 省トゥアンザオ (*Tuần Giáo*) 県における表記システムの紹介する文書が一件ある。このように数は少ないとはいえこれらターイの文字に関する資料は、1950年代にターイ文字を作成する過程で「黒タイ文字」が確立するよりも前に、黒タイの人々が自分たちのことばを自分たちの文字でどのように記そうとしたのかを考えるうえで無視できないものである。のちに黒タイ文字とその表記システムがどのように確立されたのか、すなわち黒タイ文字創成のプロセスを解明する手がかりとなるからである。

本論文では、パヴィ使節団による現地収集資料に含まれる黒タイ文字表記の解説と白タイ文字資料、および同時代の1895年にディゲがハノイで出版した『タイ

語研究』(Diguët 1895) を分析の中心に据え、19 世紀末から 20 世紀初頭において黒タイ語と白タイ語がどのように表記されていたのかを示す。そのうえで黒タイや白タイの居住域がトンキン保護領として取り込まれ、伝統的な在地首領らが植民地官僚に任官されるが従来よりも地方自治の権限は縮小するという政治社会環境の変化が、現地の文字文化にどのような影響を与えたのかを歴史的に明らかにする。

本論文は 1996 年以来、筆者がベトナム西北部を中心に行ってきた現地調査、ベトナムとフランスにおける資料調査、およびそれらによって収集された現地文字資料の分析に基づく総合的な研究である。結論を先取りしていえば、黒タイ文字の創成は、植民地体制下において白タイとの政治的分化と同時に進んだ黒タイという民族的自意識の形成と表裏一体であった。すなわちフランス植民地支配が黒タイ文字の創成を促したのである。この論証を通して筆者が目指すのは、まず文字と文書をめぐる社会史研究への寄与である。というのは、本論文はある集団に固有の文字が形成される歴史的プロセスを集団内外の政治的脈絡を考慮して解明するのみならず、表記法や文書形式から文字がもつ社会的機能を読み取ろうとしているからである。次に東南アジア研究および文化人類学における民族論への寄与を目指している。従来、東南アジア大陸山地部における多言語多民族性は、それぞれの民族や集団がその移住時期と地勢的条件に応じたすみわけの点から説明されてきた。だが、すみわけが生じる過程を実証した個別具体的な研究は少ない。これに対して本論文は、それぞれの民族や集団による内外の外交と政治関係やその自発的な文化運動、といった歴史的事実の積み上げから論証するのである。

なお本論文で黒タイ語および広くターイ語は、1981 年にソンラー省、ライチャウ省、ホアンリエンソン (Hoàng Liên Sơn) 省の各人民委員会文化局の合意で確立されたローマ字表記黒タイ語 (Hoàng Trần Nghịch và Tòng Kim Ân [biên soạn] 1990: 14) を用い、ベトナム語と区別するためにイタリック表記している。

2 ターイの中の黒タイ

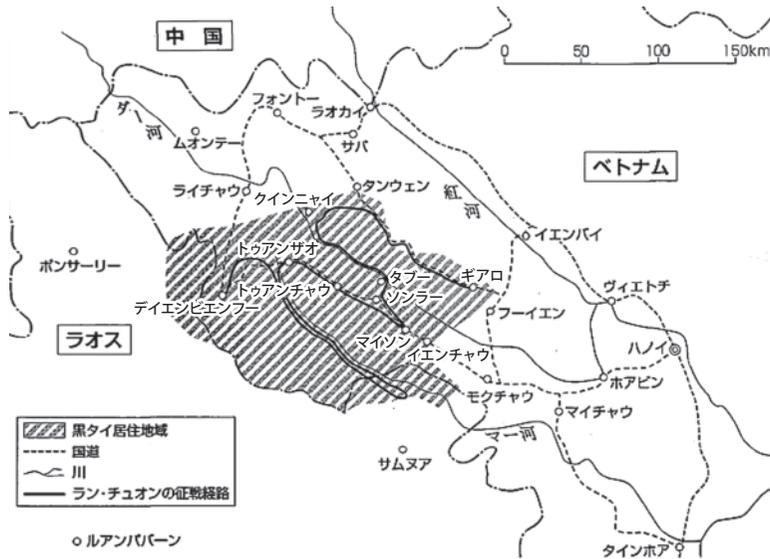
本節では黒タイの民族誌的概況について述べておきたい。

ベトナム社会主義共和国では言語的特徴、生活・文化的特徴、民族的自意識と

いう3つの指標から、54の「民族 (dân tộc)」が公定されている (Tap chí dân tộc học [biên soạn] 1980: 79)。国民は原則としていずれかの公定民族に属している。その民族分類にしたがうと、総人口約9,621万人の85%を占める8,210万人がキン (Kinh) である (2019年人口調査)。彼らが紅河デルタを中心に王朝国家を築いたベトナムの多数民族である。残り53少数民族については2019年データが未公表なので2009年データに基づくと、最も人口が多い少数民族が、紅河以東の低地に広範囲に居住しているタイ民族タイ (Tày) で約163万人、次に多いのが西北地方を中心に住むターイで155万人を擁する。

黒タイは、白タイとともにターイの地方集団とされている。いずれも山間盆地で灌漑水稻耕作を主生業とする盆地民であり、国境を接するラオス側にも約5万人、中国側にも約1万人が居住している (樫永 2013: 2)。ラオスではそれぞれ別の民族として分類しているいっぽうで、ベトナムが両者を一民族として見なしているのは、次のような文化的共通性ゆえである。ともにタイ語系の近似する言語を話すこと、上座仏教を受容していないにもかかわらず、上座仏教とともにスリランカから東南アジア大陸部東部に渡来し広まった古クメール系の文字を継承していること、姓や財産が父系的に継承されること、フランス植民地期までムオン (mường)¹⁾ とよばれる盆地政体を形成してきたことなどである。なお、ムオン (ムアンまたはムン) とは、タイ系民族が中国雲南省からインドシナ北部各地の河谷平野や盆地に10世紀以降に形成した自律的な政治単位のことである。

ターイの人々は、自分がターイのなかのどの地方集団に属するのかわかり意識している。一つには居住地域が盆地ごとにかなりはつきり分かれているからである。たとえば黒タイはイエンチャウ (Yên Châu), マイソン (Mai Sơn), ソンラー (Son La), ギアロ (Nghĩa Lộ), トゥアンチャウ (Thuận Châu), トゥアンザオ, ディエンビエンの各盆地に多い (地図1)。いっぽう白タイはライチャウ, ムオンテ (Mường Tè), フォントー (Phong Thổ), タンウエン (Than Uyên), クインニャイ (Quỳnh Nhai) などダー河上流部に住む北部グループと、フーイエン (Phù Yên), モクチャウ (Mộc Châu), マイチャウ (Mai Châu) などダー河中下流とマー川中流部に住む南部グループに分かれて分布している。この南部グループの居住地域はラオス側にも広くまたがっており、ラオス側で彼らは赤タイ (Tày Đanh, Tày Đeng) を自称している。ベトナムの白タイ南部グループ (自称は「白



地図 1 黒タイ関連地図 (桒永 2011a: 2)

タイ) も赤タイとしてあつかう研究者もあらわれていて (cf. Yukti 2011), それにならない, 本論文でも議論の混乱を避けるため便宜上の分析概念として白タイ南部グループについては「赤タイ」として区別する。ちなみに, バヴィ使節団の報告書でもこの白タイ南部グループは赤タイと呼称されている。

白タイ, 黒タイの人々のあいだでは, 居住地域にくわえて, 次のような点に文化的差異が認識されている。たとえば既婚女性の髪型, 女性の上着の襟元の形, 家屋内の配置, 祖先を祭る忌日, 表記文字の字体の違いである。

始祖伝承にも両者には明確な差異があり, とくに黒タイの始祖伝承は文字文化との関連も深い。白タイも黒タイも 20 世紀に至るまで首領を頂点として貴族, 平民, 半隷属民, 奴隷からなる階層社会を形成していたが, 首領と貴族を世襲したのは黒タイの場合, ロ・カム系統の姓をもつ一族であった。黒タイ支配階層は, 黒タイ語でムオン・ロ (*Mường Lô*) とよばれるギアロの大盆地に生まれ, 各地を平らげながら最終的にディエンビエンにとどり着いた英雄祖先ラン・チュオン (*Lạng Chuông*) の子孫であるという伝承をもつ。この伝承は年代記『クアム・トー・ムオン (*Quâm Tô Mường*)』, 『タイ・プー・サック (*Tây Pú Xóc*)』にも記されて各地の黒タイのあいだに継承されている。

ここで本論文の分析にとって重要な参照資料である『クアム・トー・ムオン』について簡単に説明しておこう。タイ系諸言語集団の歴史研究者たちは、彼らが継承してきた歴史ジャンルの文献を十把一絡げに年代記とよんできた。階層区分が明確な彼らの社会では、統治者の出自を明確にしておくことが重要で、そのため年代記では王や首領の世系、つまり王統をその起源から語るものがなによりも大切であったのである（ダニエルズ 2002: 183-184; 2004: 55）。上記のとおり『クアム・トー・ムオン』、『タイ・プー・サク』と題された文書群はいずれも黒タイの年代記に属するが、本論文でも示すとおり黒タイの民族的自意識を考えるうえでとりわけ重要なのが『クアム・トー・ムオン』である。というのは、これが最も人口に膾炙し、しかも内容的に黒タイの広い居住地域と関わり、しかも世界の創世から書記当時までの最も長い歴史的スパンを扱っているからである。

クアム・トー・ムオンを直訳すれば、「くにを語る話」である。『クアム・トー・ムオン』は、天地開闢に始まり、ギアロに始祖が降臨し、ムオンがそこに最初に築かれて以来の各首領の系譜と事績を説いている。その写本は1960年代末までに、トゥアンチャウ、マイソン、ソンラー、トゥアンザオ、ディエンビエン、ギアロ他の各地で33件収集されたという（Cầm Trọng và Phan Hữu Đạt 1995: 372）。その写本は現在でも各地の村落に散在し、2002年11月に筆者はトゥアンチャウだけで2件収集しているから他にも見つかるであろう（樫永 2011b: 12-13）。この年代記がこれほど民間に多く流通した理由は、葬式でこの全文を棺桶の前で個人とその家族、親族たちに読み聞かせる習慣が、1960年代まで黒タイの間では一般的に継承されていたからである。ちなみにこの習慣が廃れたのは、社会主義化の中で封建領主として批判されたかつての首領の系譜と事績を称える内容を読む行為が封建遺習として党によって批判され、その写本の多くが失われたこと、くわえて固有文字の識字者の減少による（樫永 2007: 24-28）。

なお、本論文で『クアム・トー・ムオン』の内容の紹介に用いるのは、次の3つである。まず、トゥアンチャウの古老ルオン・ヴァン・ティック（Lường Văn Thích）によって1965～67年に筆写された写本である²⁾。彼を師と仰いでいたカム・チョンが所蔵していたその写本については、全文を日本語に筆者が訳し校注を付して2003年に公刊している（樫永 2003）。次に、1950年代に同じくトゥアンチャウで収集され、1960年に刊行されたベトナム語訳である（Cầm Trọng và Cầm

Quynh 1960)。それから、『タイ族歴史文化資料』(Đặng Nghiê n Van [chủ biên] 1977) に所収されている、ソンラーに伝わる写本を中心に、諸地域の伝本を校合した成果のベトナム語訳である。

『クアム・トー・ムオン』の記述に従うと、現在の黒タイの居住地域はラン・チュオン征戦の経路上にある諸盆地にほぼ一致している³⁾。さらに黒タイのあいだで死者の魂は故地ムオン・ロにあるナム・トック・タット (*năm tức tá t*) の沢から天上世界にのぼると広く信仰されている。これに対し白タイの首領一族はかならずしも自分たちがラン・チュオンの子孫だとは考えていない⁴⁾。のみならずムオン・ロを天上世界への昇降口であり故地であるとみなす信仰は、白タイのあいだに見られない。

このように黒タイのあいだでは集団の同質性が、特定の始祖と故地、すなわち「血」と「地」との結びつきに由来すると考えられている。しかも、このことを保証する伝承が自分たちの文字によって記され、その知識が葬式などの儀礼で読まれることで共有されてきた。この文字をめぐるポリティクスの問題こそまさに本論文の主題である。これら年代記が最初にいつ頃書かれたのかは定かではないが、筆者が知る限り 19 世紀に遡る写本は稀である。では 19 世紀末の黒タイの文字文化はどのようなものだったのだろうか。

3 トゥアンザオにおけるタイ文字 (1890 年)

パリ郊外 CADC にパヴィイ使節団の収集文書資料が収められている。それが *Papiers d'Agents archives privées* として分類されているコレクションである。このコレクションをめぐる資料調査について、パヴィイ使節団にも触れながら説明しておこう。

パヴィイ [Auguste Pavie, 1847–1925] は 1867 年以来、軍人として、植民地官吏として、探検家として 1905 年までインドシナ各地を精力的に歩き回り、探検と調査の記録を書き残した (菊池 2010)。その成果は本国への帰国後に全 10 冊からなる『パヴィイ使節団—インドシナ 1879–1895』(*Mission Pavie: Indochine 1879–1895*) として編集刊行されているが、パリの CADC には彼の旅行日誌・民族誌・写真資料とともに、1887 年に在ルアンパバン副領事に任じられた彼が収集した現地語で書かれた在地文書をはじめとして植民地領土確定交渉の必要資料が全 68 巻収蔵され

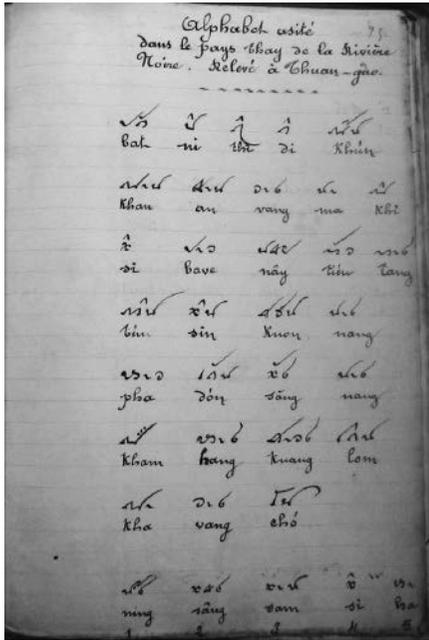
ている。それらの多くが未公開であり、筆者はその資料調査を2009年9月7日～15日、および2010年9月6日～13日の計15日間おこなった⁵⁾。マイクロ化されている一部の資料についてはマイクロで閲覧し、それ以外については現物を手に取り必要な資料を写真撮影した。その目的はベトナムと中国雲南との国境地域にあった19世紀後半の複雑な政治帰属関係、および現地の伝統政治権力の外交政治に関係する記述と、白タイ、黒タイによる現地文書を探ることであった。

この *Papiers d'Agents archives privées* の中に Pavie 42 とラベル付けされたノートがある。マシー (Massie) による1890年11月から翌年1月までの記録である。その中に、「トゥアンザオ (Thuan-giao) のタイ (Thay) の文字」として現ディエンビエン省トゥアンザオにおける現地文字が紹介されている。

冒頭に、ペン書きと筆書きによる現地文字の綴り方を紹介すると趣旨が記されたあと、最初に十進法の数の規則の説明があり、頁をかえて「トゥアンザオにおける黒河^{グー}のタイ族地域の在地アルファベット」(図版1)というタイトル下に現地文字が並んでいる。一語ごとに区切った30語が7行にわたって書き記され、その下にローマ字で読み方が添えられているのである。その7行は特定の文書からの引用と思われる。というのは慣用的な言い回しを含んでいるし、でたらめに文字を配列したにしては同じ子音字や母音符号の繰り返しが多く、すべての子音字や母音符号の網羅的な説明にはなっていないからである。また数については、「1」から「10」までと「11」、10の位増しに「20」から「90」までと「100」の数字の綴り方と読み方が記されている。

その次の頁には「ライチャウの筆書き文字」(図版2)として、ライチャウの白タイが用いる文字の字母が子音字と母音符号に分類して羅列され、それぞれにローマ字による読み方が付されている。

つまり、後の黒タイ文字へとつながる文字と当時のライチャウ付近の白タイによる文字が混在したかたちで、ターイ (マシーの表記では Thay [タイ]) の文字としてマシーのノートには紹介されているのである。しかし、誰がこれら現地文字を書き記したのかは書き残されていない。そのため、トゥアンザオとライチャウそれぞれの字体が、同一人物によるものか、あるいは別の人によるものかは不明である。また、なぜトゥアンザオの字体についてはペン書きのものが、ライチャウの字体については筆書きのものが紹介されているのか、その理由もはっきりし



図版 1 マシーのノートにある「トゥアンザオにおけるダー河のタイ族地域の在地アルファベット」(2009年, 筆者撮影)

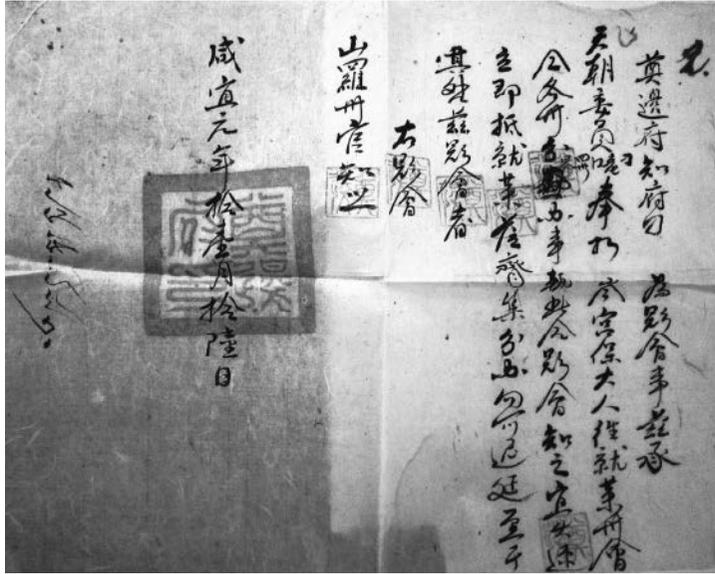


図版 2 マシーのノートにある「ライチャウの筆書き文字」(2009年, 筆者撮影)

ない。いっぽうで19世紀後半の黒タイや白タイの固有文字資料として今日まで伝わっているものは、ほとんど筆書きなのである。

このマシーのノートのなかに並んでいる「トゥアンザオのタイ文字」を詳細に検討すると、母音符号についてある特徴に気付く。母音 /e/ をあらわす「黒タイ文字」における母音符号マイ・ケ (*may kē*) がなく、二重母音 /ia/ を示す母音符号マイ・キア (*may kia*) が、/e/ と /ia/ 双方の母音を示すために用いられている。実はライチャウ、フントー、タンウエンを中心とする白タイ語は二重子音が黒タイ語より少なく、/e/ と /ia/ の母音の対立がなくいずれも /e/ で発音する。そのため、ライチャウの白タイ文字には黒タイ文字における母音符号マイ・ケがなく、マイ・キアが /e/ の音があらわす。こうした母音符号の使い方から察するに、このノートにトゥアンザオの字解を記した人物は、ふだん白タイ語話者なのかもしれない。

なお1890年頃のトゥアンザオとライチャウにおける現地文字を、黒タイ文字、



図版3 ディエンビエンフー知府デオ氏からソンラー州官へ送った文書(1884年)。左端に現地文字による書き込みがある。(2009年、筆者撮影)

白タイ文字と呼ぶことには注意が必要である。繰り返しになるが、黒タイ文字、白タイ文字とは20世紀半ばに「ターイ文字」の正書法をつくりあげる過程でそれぞれ標準化された文字といい。実際、今日的視点からすると、とくに19世紀半ば以前の古い現地文書には両字体がしばしば混在している。ことさら黒タイのあいだで継承されている文書に両者の混在が著しい。本節で紹介した「1890年のトゥアンザオのタイ文字」もその一例である。つまり、黒タイのあいだで古くから継承されてきた文書記述を、黒タイ文字の知識のみに基づき音読し解釈するには困難が伴う。なお、ディエンビエンフー知府職にあったデオ氏が咸宜元年(1884年)11月にソンラー州官に宛てて書いた漢文文書の端に「この書類はムオン・ラー(ソンラー)に持って行く (*baw nī au pay Mường Là*)」と書き込んだメモがある。白タイのデオ氏によるものか、ソンラーの黒タイによるものか不明であるが、これなど今日的には完全な白タイ文字である(図版3)。

4 カム・オアイによる書簡（1894 年）

もちろん「1890 年のトゥアンザオのタイ文字」に近い時期のもので、黒タイ文字の知識のみで読み下せる手写本がないわけではない。たとえばムオン・ムアツの黒タイ首領として枚山州の知州をつとめたカム・オアイ（*Căm Oai, Càm Oai*）による書簡がある（写真 1）。「成泰六年十一月二十一日」と記された日付から判断して、陰暦 1894 年 11 月 21 日すなわち陽暦 1894 年 12 月 17 日のものである。

この書簡はパヴィ使節団関連の資料として CADC に所蔵されているのではない。ディゲ [E. Diguët, 1861–1921] の『タイ語研究』（Diguët 1895）中の「タイ文字練習（*Exercice d'écriture Tai*）」に掲載されているものである。パヴィとともにシップソンチャウタイ（*Xíp xong chau tây*）における平和回復と統治機構の再編、および当該地域に対するシャムの影響力の排除に多大な功を挙げた將軍ペヌカン [Pennequin, 1849–1916] をして「仏塔のようにタイ語を話す」⁶⁾と言わしめるほど、自由自在に現地語を操り敏腕家のディゲが、1893 年から 1895 年までペヌカンの後を継いで当地を指揮した。

ここでシップソンチャウタイについて説明しておこう。シップソンチャウタイの語義は「12 のターイの州」であり、白タイや黒タイの首領たちによる土侯国連合があった現ベトナム西北部にほぼ相当する地域を示す。フランスが清朝とシャ

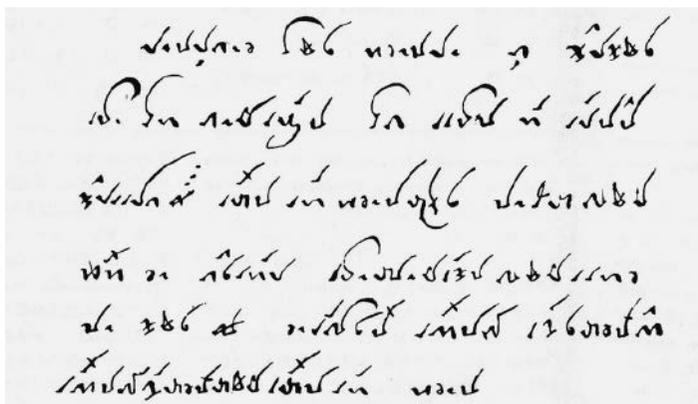


写真 1 カム・オアイによる書簡（1894 年）。『タイ語研究』（Diguët 1895）にある全文ではなく、佐藤（2001a）による「黒タイ文字」の解説に引用された抜粋からの転写。

ムそれぞれと締結した天津条約（1885年）とフランス・シヤム条約（1893年）によって清朝がベトナムへの宗主権を放棄し、シヤムがルアンパバン（ラオス）への宗主権を放棄してインドシナ連邦の一部になるまで、シップソンチャウタイの首領たちはルアンパバン、ベトナム王朝、清朝（中国）という複数の国家に朝貢を行っていた（Thongchai 1994: 98–99; 岡田 2012a: 3）。シップソンチャウタイがインドシナ連邦の一部となった頃の 1894 年、パヴィイは同じくディナン（Dinan）出身のディゲと現地知り合って意気投合したようであるが⁷⁾（Pavie 1908: vi）、カム・オアイによる書簡もまさにその年の暮れのものである。その全文を以下に訳出しておこう。

マイソン州知州カム・ヴァン・オアイより、シップソンチャウタイを統べる大官、ヴァン・ブー管道に書面で申し上げます。今月 18 日に受けました報告では、理事長官から文書が私に届き、わがマイソン州現地歩兵隊が逃げ帰ったとのこと。二名の者、すなわち一人の名はルオン・ヴァン・ティ、もう一人はロ・ヴァン・ホイです。また、とにかくすぐにチエン・ティ里長、チエン・カット里長に命じて探し出すようにと指令を賜りました。しかし、彼らの家はわかりましたが今は姿が見えないため、私は彼らを探し出すように命じております。いつでもかれらを捕らえさせてください。すぐに理事長官のところに参上します。彼らはそう遠くに行っていないと思われませんが、行方はわかりません。理事長官にはソンラー知州にもおたずねいただくようお願いいたします。敬白

成泰六年十一月二十一日

マイソン知州カム・ヴァン・オアイ

「シップソンチャウタイを統べる大官、ヴァン・ブー管道」とはディゲのことであろうか。紙面全体のレイアウトがわからないのは残念であるが、タイの固有文字で記された行政文書や書簡は今日までほとんど伝わっていないため、現代では貴重な資料である。『タイ語研究』ではこの書簡が「タイ文字」を例示する唯一の文例である。この文例に基づくディゲによる「タイ文字」の解説を検討すると、19 世紀末の「黒タイ文字」による文書作成について次の特徴が明白になる。

- (1) 句読点はないが、分かち書きが明確で、ときに改行も行う。
- (2) 「敬白」のような書簡における形式的な文言がすでにあること、記述年月日と記述者の姓名を末尾に改行して右寄せで書くなど、所定の書簡の形式が整っている。

- (3) 母音符号は、後の黒タイ文字のものとしてすべて同じである。
- (4) どの子音字が末子音字に用いられるかによって、母音符号の読み方が、のちの黒タイ文字と異なる場合がある。ただし、読み方の規則が異なるだけであり、母音符号に関して音声と文字が一对一对応になっている点は、後の「黒タイ文字」と共通している。
- (5) すべての子音字が後の黒タイ文字に引きつがれている。
- (6) /k/ の低子音字と /t/ の高子音字、/m/ の低子音字と /n/ の低子音字、/m/ の高子音字と /n/ の高子音字など、ある子音字の形態は別の子音字の形態に非常に類似しているため、子音字の形態のみから子音の発音の特定が困難な場合がある。
- (7) 表記のみから声調の特定はできない。なお声調符号の導入は 1950 年代以降である。
- (8) 年号、官職名、ベトナム語からの借用語のみならず、「名 (tên)」のような日常的に非常によく用いられる名詞にも、ベトナム語を用いている箇所がある。

書面のレイアウトに関する (1) と (2) から、分かち書き、改行、右寄せ、定型的な修辞表現などにより、他人が容易に意味を把握できるよう視覚形式の工夫が明確になされていたことがわかる。(3) から (7) は黒タイ語の表記規則に関することで、音声と文字の一対一对応が子音字と声調に関してはまだ実現してなかったことを示し、(8) はベトナム語使用によって文の格調が高くなることを示している。

ここに「成泰六年十一月二十一日」の年号が、通常のタイ語の語順をひっくり返して年、月、日の順で記されているのは、ベトナム王朝下の公文書で用いられた漢文の形式を模しているのであろう。あるいは「月」のみ tháng というベトナム語を用いているのは、以下の理由にもよるのかもしれない。黒タイは独自の暦をもっていて、黒タイ暦と漢越暦（陰暦）とではつねにちょうど 6 ヶ月ずれている。つまり黒タイ暦 1 月 1 日は漢越暦 7 月 1 日にあたる。黒タイ語の月 (*buon*) ではなくベトナム語を用いることで、いずれの暦に基づいているのか混乱させないように、つまり漢越暦であることを明示しようとしたのかもしれない。

いずれにせよ、以上のような形式と表記の工夫を加えることで、カム・オアイの書簡は他人にも意味把握しやすい文書となっている。視点を変えれば、このことは1890年代の黒タイ社会において、意味の取り違えがなく実務的の用件を伝えることができる黒タイ語による文書作成の必要が生じていたことを示している。

5 枚山知州カム・オアイ

前節で紹介した文は、基礎的な読み書き能力があれば各語の音声を文字から再現でき、逐語的に意味が理解できる。このような公共性の高い文書を作成したカム・オアイ [1871–1933] とは、どのような人物なのであろうか。興味深いことに、ディゲは『タイ語研究』のタイ (Tai) 社会に関する解説中に「シップソンチャウタイ (タイの12州) の頭目たる名家」⁸⁾ という節を設けていて、マイソン州に関する記述箇所にカム・オアイについて述べている (Diguët 1895: 18)。以下に全文を引用する。

マイソン州の首領はカム・オアイである。本名のカム・タイックよりも、カム・オアイの名の方がよく知られている。ダー河から紅河に駐屯する士官なら誰でもこの弱冠25歳の知州を知っている。才気煥発、勇猛果敢にして理知に富み、誰とでも打ち解け合える。戦闘では民兵を統率し、所領を治め、19歳の頃から彼の資質を高く評価している指揮官たちに熱意をもって仕えている。欧風の衣装を着こなし、士官たちと同席しても気後れしないし、通訳なしにフランス語を十分に理解できる。われわれの文化的洗練の価値をもっとも認めている唯一のタイかもしれない。

このようにディゲは12州の首領を紹介するなかで、カム・オアイを激賞している。ここではまず、カム・オアイの本名について補足しておこう。植民地期の黒タイ各首領は以下の4つの名をもっていた。

- i) いわゆる本名。家族の間での呼称であり、死後に祖先としてまつられる場合もこの名が用いられる。
- ii) 各ムオンの法、行政、立法などを担当する役職者組織「長老会 (*thầu ké hăng mường*)」に献金し、チュオン (*Chường*) やチエウ (*Chiểu*) を冠し

た名を賜った。これがあって役職につくことができる。

- iii) 「長老会」から授かる首領たるアン・ニャー (*Án nhā*) としての公的な名
- iv) キンの王 (ベトナム王朝) から下賜される姓名 (樫永 2009: 192–193)

カム・オアイの場合、本名がタイック (*Thạch*) またはテツ (*Thệk*) (どちらにも翻字可能である)、アン・ニャーとしての公的な姓名がカム・ブン・オアイ (*Căm Bun Oai*), ベトナム王朝から下賜された姓名が^{カム・ヴァン・オアイ}琴文威 (*Căm Văn Oai*) であった。中間名のブン (*Bun*) や文 (^{ヴァン}*Văn*) は黒タイの間で男性であることを示す符号としての意味合いが強いので、しばしば省略される。拙訳からの引用になるが、1930年以前にフランス植民地政府の指示により編纂されたと考えられるムオン・ムアツ (*Mường Muak*) すなわちマイソンの慣習法の文書には次のように記されている。

カム・チョム公が退くと、その息子カム・タイックが新しいフィア (筆者注: 首領のこと) の適任者として就任した。庚寅の年 (成泰 2 年 [1890]) のことである。

カム・タイック公はキンの王にカム・ヴァン・オアイの名を賜った。バーンムオン (筆者注: 長老会をはじめとする役職者) は彼をカム・ブン・オアイと呼んだ (樫永 2001: 292)。

このようにオアイの名がベトナム王朝から下賜されたものであることが、彼がマイソン知州に任じられていた頃に編纂された慣習法文書に明記されているのである。

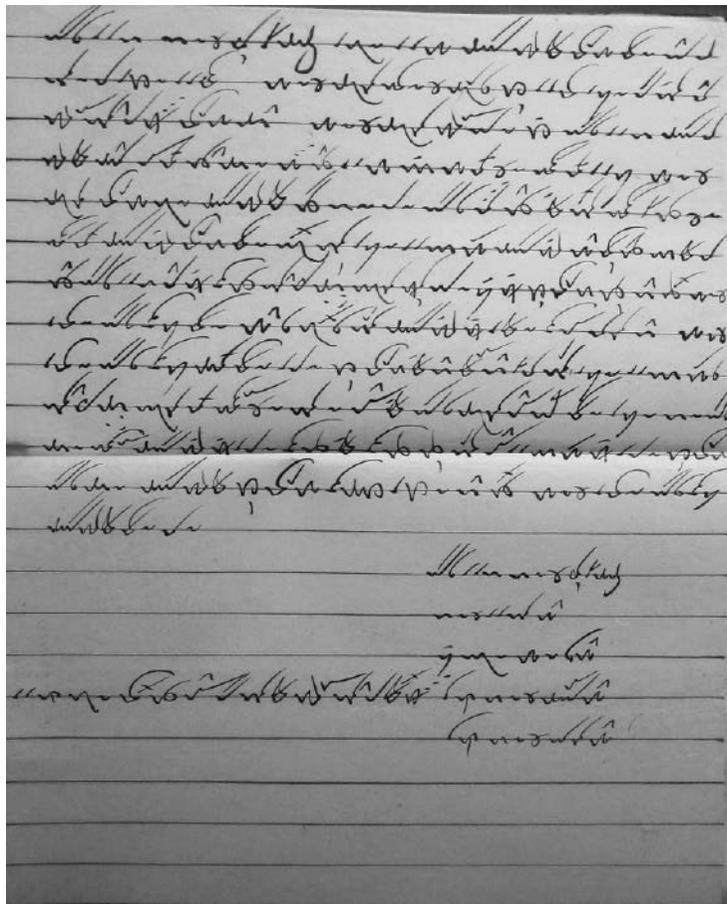
カム・オアイの名についてはこれ以上深入りしない。もう一つ重要なことは、デイゲが記しているとおおり、当時、カム・オアイが現地に駐留したフランス士官たちに篤い信頼を寄せられていたことである。ムオン・ムアツ支配階層にとってもこれは誇るべきことであった。ムオン・ムアツの年代記『クアム・トー・ムオン』にも、「カム・ヴァン・タインは首領を 6 年つとめた。フランスがターイの地を占めると、タインは退位を乞い、カム・ヴァン・オアイがかわって位に就いた。その年つまり成泰 2 年 (1890)、カム・ヴァン・オアイは (ムオン・ラー首領) ブン・ホアンの長女と結婚し、カム・ヴァン・ズン、カム・ヴァン・ビン、カム・ヴァン・ゾンを得た。フランスはオアイを剛胆果敢と見て管兵に任じた」 (*Đặng Nghiêן Văn [chủ biên] 1977: 168*) と書き記されている。カム・オアイの資質についての評価は、ムオン・ムアツ側の視点とデイゲの記述にも明らかに反映されて

いる。

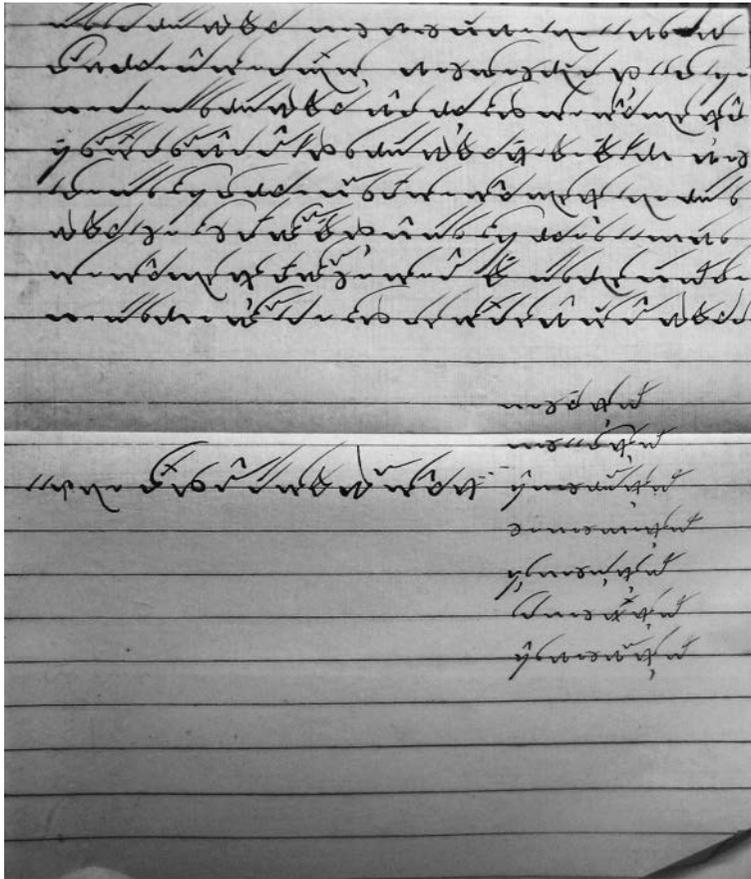
6 パヴィ史料中の白タイ文書

ここでカム・オアイの話題から一度離れ、パヴィ収集資料中にある他のターイ文字文書を見てみよう。

CADC 所蔵のパヴィ収集資料の中に 3 件の白タイ文書が確認できた。カタログ Pavie57 中の 2 件と Fonds des affaires diverses 1815–1896 の Carton14 中の 1 件であ



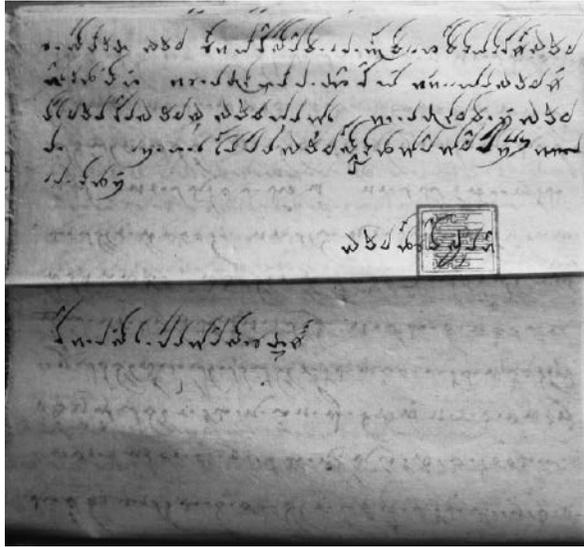
図版 4 ムオンテ首領による報告（1895年）。全文の日本語訳は「付録」参照。
（2009年、筆者撮影）



図版 5 ムオンブム首領による報告（1895年）。全文の日本語訳は「付録」参照。
（2009年，筆者撮影）

る。前者は清朝との国境画定に関わるムオンテ，ムオンブム各首領らによる西暦1895年3月の報告（図版4，5）であり，罫線の入った洋紙（横25.5cm×縦30cm）一葉の片面に記されている。後者はカム・ドイ（Cam Doi）による西暦1894年11月の報告（図版6）で，半分に折り合わせた無地の漉き紙6枚の上部を紐一本で綴じた12頁（横25.5cm×縦24cm）に，現地文字が書き連ねられている。前者2件の内容については，本論文末尾の「付録」に詳しく紹介しているので，ここでは形式についてのみ述べたい。

これら3件はいずれもムオン・ライの現地文字で記されている。現在のターイ



図版 6 カム・ドイによる報告の最終頁（1894年）。すでに清朝への帰属は否定していたが、文書の信頼性を高めるために印が押してある。（2009年、筆者撮影）

語を基準にするならいずれも白タイ文字の古型と見なせる。いずれも以下の形式的特徴を持つ。

- ①句読点はないが、分かち書きが明確で、文脈に応じて改行も行っている。
- ②冒頭の文句が「謹んで申し上げます (*khhoi chắc dam mĩ san chẽng sũ...*)」といった紋切り型の定型句あるいは書き手の自己紹介に始まり、末尾には記述年月日を左寄せにして、記述者の姓名を右寄せにして書き記すなど、書簡の定まった形式が確認できる。
- ③後のライチャウの白タイ文字や黒タイ文字と、母音符号に大きな違いはない。
- ④すべての子音字が後の白タイ文字に引きつながれている。
- ⑤末子音字が省略されていることがあるが、省略の仕方にはある程度規則性がある。
- ⑥表記のみから声調の特定ができない。ちなみに声調符号の導入は1950年代以降である。

①と②は書面のレイアウトに関することであるが、分かち書き、改行、右寄せ、定型的な文言などで、他人が容易に意味を把握できるような視覚形式の工夫があることを示している。③～⑥はライチャウ付近の白タイ語の表記規則に関することであるが、音声と文字の一対一対応が、とくに声調に関しては実現してなかったことを示している。とはいえ形式と表記の工夫が以上のように明確であり、これら3件もカム・オアイの書簡と同様に、基礎的な読み書き能力を身につければ文意を正確に理解できる実用的な文書である。

7 連続記法から分かち書きへ

書面のレイアウトがこうした行政や通信文書においてすでに定型化されていることは注目に値する。というのは、たとえばソンラー省総合科学院図書館地誌庫だけでも1,500件近くの歌謡、物語、暦書、祈禱儀礼書、年代記などのタイ文字文書が保管される (Hoàng Trần Nghich, 1998: 188–191)。また非常に少ないとはいえ系譜文書 (家霊簿)、慣習法なども20世紀前半までに記された古文書として民間では継承されている (檜永 2011b: 9)。しかしこれらには句読点はもちろん、分かち書きも認められないからである。歌謡の場合に、歌の始まりや大きな切れ目を示すある特殊な符号が付されているにとどまる。のみならず、文字の省略の仕方は不規則であり誤字脱字も多いので、書き記した当人か文言を最初から覚えている人でなければ読むのにかなり苦勞する。しかし、本論文で取り上げているような白タイ、黒タイの文書では明確な分かち書きがなされているのである。この紙面レイアウト上の工夫は、以下に述べるように、黒タイの文書作成の歴史を考えるうえで画期的なことである。

単語と単語の間に空白をおいて語の独立性を示す、分かち書きという書法は、西欧においても7世紀から12世紀にかけて歴史的に形成されたものである。このことをこれまでの古書体学の蓄積は実証している。サンガーの『語間の空白』 (Saenger 1997) によると、連続記法から分かち書きへの変化は、アイルランドとイベリア半島という中世西欧の辺境でまず起こった。中世西欧における分かち書きの普及とそれが知的活動にあたえた変化を論じたサンガーの書の要点を、大黒 (2009: 41–42) による簡潔なまとめに沿って以下に述べよう。

アイルランドの場合、高度な異文化としてのキリスト教の宗教テキストを記したラテン語という外国語を読み解くために行った工夫のうち、句読点、書体変更、書き込みにも増す最大の工夫こそ分かち書きであった。いっぽう、イベリア半島ではアラビア科学文献のラテン語への翻訳のために分かち書きがアラビア語から導入された。こうして辺境に始まった分かち書きは、ヨーロッパ大陸中心部には10世紀から11世紀にかけての修道院改革を経て本格的に定着する。10世紀末イングランド南部に始まった修道院改革運動はそれまでのような典礼におけるテキスト朗唱や、ゆっくり音読して耳で記憶するという読書にかえて、個人の祈りと静かな読書による瞑想を奨励した。この改革運動は11世紀以降ヨーロッパ各地に広まった。黙読の習慣とともに分かち書きも広まった。音読では声が語の識別を助けてくれるが黙読では視覚で見分ける必要あり、そのためには分かち書きが有利であったからである。つまり黙読の必要が分かち書きを促したのである。

12世紀には分かち書きと黙読は定着するが、このように内密な読書が可能になったことは、たとえば自伝執筆の流行にもうかがえる個人の内面の探求、異端的な考えの発生、ポルノの蔓延を導いた。他方、目だけで文字を追うことは、いわゆる斜め読みを可能にし多読をも広めた。この多読という新しい読書経験が12世紀に発展しつつあった大学とスコラ学の発展にも大きく寄与した。つまりヨーロッパで分かち書きと黙読の定着は、精神革命といえるほどの知的活動の変化をもたらしたのである。

その後ヨーロッパでは活版印刷の普及を経て16世紀から18世紀において「黒に対する白の決定的勝利」が実現する。すなわち段落や改行を増加させてテキストを単位ごとに分解し、ディスクールの分節がページ上の視覚上の分節のうちに見てとれるような紙面レイアウト上の工夫が発展し、インクで文字が記されていない余白が多くなっていく（シャルチエ 1966: 33）。

言うまでもなくこうした黒に対する白の優越は、ヨーロッパでは7世紀に始まったとされる語と語の「連続記法から分かち書きへ」という変化の延長線上に生じた物的、技術的現象である。ここで黒タイ、白タイのあいだに伝わっている現地文書に目を転じてみると、もっとも数多く伝わっている歌謡、物語、暦書、祈禱儀礼書などのいずれでも分かち書きは実現していない。そのことから考えて、1890年代のタイ文字文書で確認できる連続記法から分かち書きという変化は、フラ

ンスにシップソンチャウタイが植民地化される過程で、行政や通信文書の作成と流通と管理の必要性の増大に対応するために生じたものであろう。

一般的にいえば、ダニエルスが指摘するように、書かれた文字が口頭でのことばより信用できるという考えは東南アジア大陸部の現地文字に関して必ずしも当てはまらない。たとえば中国雲南省西部に住むタイ系民族タイ・マウ (Tay Maaw) 社会においても、年代記は読誦されるために韻文で記されていて、韻の響き、ことばの聞こえ良さ、繰り返し、付け足しが、聞き手の耳を楽しませ、かつ理解を助ける。また、ときにはアルファベットの擬人化などの技法によって、語りの単調さを破る独特の工夫が凝らされさせする (Daniels 2009)。このように書承文化における口承性が果たす役割の大きさ、つまり口頭でのことばに対する信頼の大きさが、広く東南アジア大陸部に住む諸民族の文化伝統の特徴をなしてきた (Kashinaga 2009: 8)。黒タイ、白タイのあいだで伝わっている文書の多くの読み方も例外ではない。

修道院改革以前のヨーロッパにおけるのと同じく、黒タイや白タイの社会では個人的な黙読ではなく、ゆっくり音読して耳で記憶する集合的読書が当たり前であった。しかし 19 世紀後半にフランス植民地主義のシップソンチャウタイへの伸張に伴って、行政や通信文書という新しいタイプの現地語文書が出現する。これらは、口承性と密に絡み合っている在来の書承文化とは一線を画していた。知的活動の観点からいえば、音読から黙読への変化の萌芽をそこに認めることができる。

8 シップソンチャウタイにおける文書主義

1890 年代にはすでに黒タイ、白タイのあいだで確認できる行政や通信文書などの新しい現地文書と新しい読書の出現は、社会的観点からは、読み書き能力に習熟している人なら誰でも内密に読めるという意味で公共性の高い文書を、黒タイ語や白タイ語で作成する必要が生じていたことを物語っている。三瀬 (2009: 264) に倣って、人々が証言よりも証書を信頼する習慣の出現や、対面より書面を優先する規則の成立といった口頭より文書を重視する態度を広く文書主義とよぶなら、文書主義はその時期の黒タイと白タイそれぞれの社会にも明らかに発生していた。しかし当該地域における文書主義は、フランスの影響のみに起因するのではない。

1890年代以前に歴史を遡り、シップソンチャウタイをめぐる政治情勢との関連から、当該地域の文書主義について簡潔に記しておこう。

その地域に対し、ベトナム黎朝（1428-1789）は現地首領らを「輔導」、中国清朝は「掌寨」に任官し、彼らに自治を委ねた。このようにして維持されていた各ムオンの自律性は、河谷盆地の水稲耕作に利する用水管理を通じた排他的支配の伝統のみに依るものではなかった。18世紀から19世紀にこの地域の各首領たちは、広範な交易の展開、華人や異民族の北からの移住、武装集団の来襲といった諸変動に巧みに適応していくことが求められていた。たとえばライチャウ首領デオ氏を例にとりあげると、領民を漕ぎ手やキャラバンに編成、組織化し、塩、茶、アヘンの輸出入等の交易活動を積極的に展開したデオ・ヴァン・チ（Đèo Văn Trì）は、黒旗軍の劉永福など外部から侵入してきた有力武装勢力とのあいだに擬制的父子関係を取り結ぶ、あるいは服属する隣接国家から政治的庇護を獲得するために漢文文書作成能力を備えた「字識」とよばれる漢族の下級知識人を迎え入れるといった生存戦略を駆使することで、ムオンの自律性の維持に努めたのである（武内 2003: 694; 2010: 190）。紙幅の都合上これ以上の詳細は割愛するが、19世紀の対清朝、対阮朝の外交関係において漢文文書作成の不可欠であった。このことが現地にまず漢文の文書主義を出現させていたのである。

その後フランスによる植民地化の過程で、文書主義は支配階層のあいだでさらに浸透した。交通・通信システムが未発達でありしかも遠隔地にあった植民地への指令を、文書を介さずに口頭のみで伝える伝令システムはほとんど意味をなさない。そのため19世紀の植民地支配は文書依存的であった。19世紀末の当該地域において文書とは、第一にフランス語によるものであり、次に漢文のものであった。実際、バヴィ収集資料中にあるシップソンチャウタイ関連の文書も漢文の方が現地語によるものより多い。「ソンラー州官による報告（1884年）」（図版3）に現地文字が書き込みメモにしか用いられていないように、対外的には現地文字は漢文よりさらに下位に位置づけられていた。しかもフランス語以外による文書には、漢文も含み、すべてフランス語訳添付の必要があった。

三瀬（2009: 246, 264）が指摘するように、文書作成は（とりわけ前近代において）高い技術的コストと技術力を擁する特殊技能であったから、文書主義という文書に対する強い執着の出現には相応の理由があった。その理由とは、とりわけ

組織やシステムが不安定な状態にあるか、不安定に抗う場合、と考えていい。シップソンチャウタイにおいても、植民地支配を受けて白タイや黒タイの社会が近代官僚制度下に組み込まれていくなかで、フランス語による文書主義が浸透し強化された。このように現地の政治・外交環境がドラスティックに変化し社会が再編されるなかで、現地文字による文書主義の発生が促された。その物的証拠となる同時代資料がパヴィ収集資料中の白タイ文書とディゲが紹介したカム・オアイの書簡であるが、のみならず「ソンラー州官による報告（1884年）」にある書き込みメモの存在も、文書主義の発生を裏付けている。音読して耳で愉しみ記憶する一般的な集会的な読書とは異なり、情報のやりとりを第一義として文字を用いる精神態度がここにあらわれているからである。

9 1890年代のムオン・ムアツ首領一族の写真

CADC所蔵のパヴィ収集資料に含まれる白タイ文書3書が書かれた1894年頃の現地の政治社会的環境はどのようなものだったのであろうか。資料的制約もあるため、本節では黒タイのムオン・ムアツ首領カム・オアイの動向から描き出す。

一枚の写真がある。カム・オアイの実孫でベトナム民族学の泰斗カム・チョン（Cảm Trọng）[1934–2007]が蔵していた、ちょうどカム・オアイの書簡の時期に撮影された家族写真である。そこには、右からカム・オアイ、その父カム・チョム（Cảm Chôm）[別名琴文清（Cảm Văn Thanh）、カム・タイン]、その正妻でカム・オアイの母カム・ダー（Cảm Đà）と側室カム・スオイ（Cảm Xươi）の4人が映っている（写真2）。

ムオン・ムアツの年代記『クアム・トー・ムオン』には、「カム・タインは6年間首領をつとめたが、フランスがターイの地に来ると息子カム・オアイに位をゆずった」（Đặng Nghiêן Vạn [chủ biên] 1977: 168）と簡潔である。カム・チョンから筆者が聞いたところでは、カム・タインは帝国主義の侵略に対しベトナム阮朝側に与し、1873年12月には阮朝の命を受けた劉永福が率いる黒旗軍に従って、当時ハノイを占領していたフランス軍をカウザイ地区（Cầu Giấy）で破ってガルニエ [Marie Joseph François Garnier, 1839–1873] を戦死させた。さらに黒旗軍とリヴィエール（Henri Rivière）が率いるフランス軍がカウザイで1883年5月に衝突

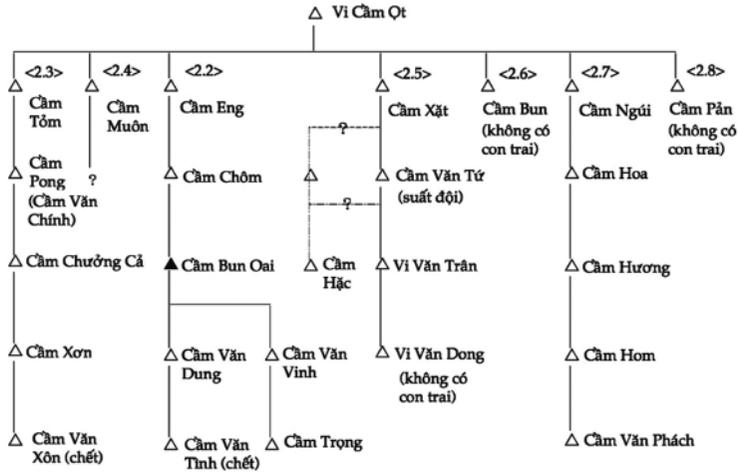


写真2 1890年代と思われるカム・オアイの家族写真（2001年、筆者撮影）

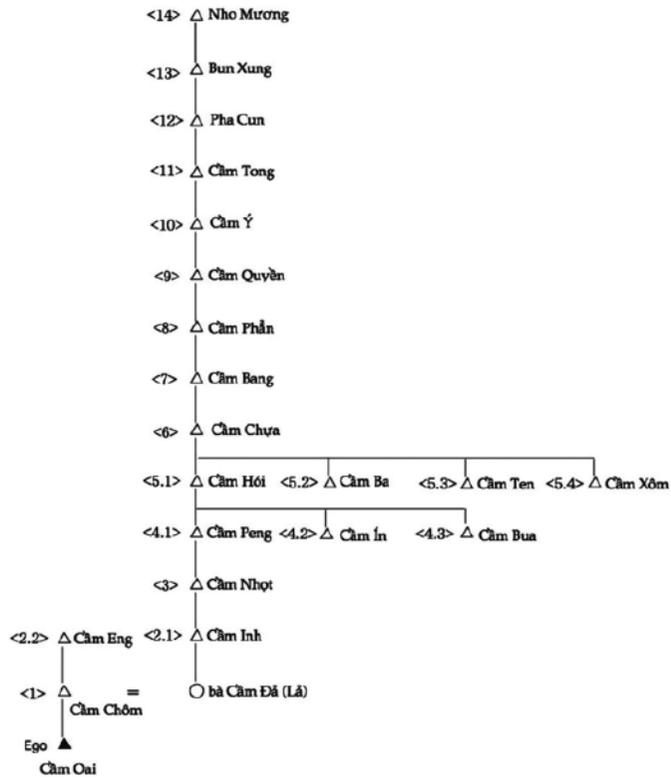
した際にも武勲をあげ、その後もベトナム中部や紅河デルタにターイの軍を率いてフランスとの戦闘で活躍したという。

年代記の記述にしたがえばカム・タインは1885年から1890年にかけて首領としてアン・ニャー職にあったということであろうが、「西北地方におけるターイ首領年表」(Đặng Nghiê n Vậ n và Cẩ m Trọ ng 2002: 170)によるとカム・タインは1885年にムオン・ムアツ首領になったが、同年のうちに交代してデオ・ヴァン・チの弟デオ・カム・ソーン(Điê u Cẩ m Xո ng)が1890年までつとめている。フランスに抵抗したカム・タインを牽制するためにフランスが白タイの首領一族をムオン・ムアツ知州に据えたのであろう。

カム・オアイの系譜文書である「家霊簿(xổ phi hườ n)」によると、カム・タインにはカム・ダー、カム・スオイの二人の妻がいた(樫永・カム 2007: 19-20)。やや複雑であるが、カム・オアイの実母カム・ダー(表記通りではなく、カム・ラーと発音されることの方が多い)はカム・タインの二代前の首領カム・イン(Cẩ m Inh)の娘である(系図1)。カム・インの祖父カム・パイン(Cẩ m Pẩ nh)が首領であった時代、モクチャウ(ムオン・サーン)の貴族出自出身のヴィー・オット(Vi Ớ t)は政治的手腕に優れ、ゆえにカム姓を賜った。そのヴィー・オット(カム・オット)がカム・タインの祖父である。カム・タインはヴィー・オットの息子カム・エン(Cẩ m Eng, Cẩ m Pេ ng)から首領の地位を世襲するが(系図2)、カ



系図 1 ヴィー・オット子孫の系譜関係 (樫永 2009: 352)



系図 2 家霊簿に基づき筆者が作成した、カム・オアイから 14 代前の首領までの系譜 (樫永 2009: 353)

ム・オアイの系譜は母カム・ダーの父系ラインでつながっている（樫永・カム 2007: 19–20）。

写真の話にもどろう。この写真は上下に破れていて下半分が絵で補正されているようであるが、服装に注目したい。カム・タイン、カム・オアイ父子は円幘頭えんぼくとうを頭に被っている。これはベトナム阮朝文官の礼装である（岡田 2013: 315）。また息子カム・オアイは洋式の革靴を履き、フランスから贈られた勲章を胸にさげている。黒いズボンも洋服かもしれない。これに対して父カム・タインは阮朝文官の礼装で履き物も阮朝式である。女性二人の履き物も同様であるが、一方でタン・カウ（*tăng cẩu*）とよばれる黒タイ既婚女性に特徴的な髻を結び、黒タイの礼装である長衣を身につけている。阮朝官人として黒旗軍にしたがいフランス植民地化に抵抗した父カム・タインの衣装、一方でフランス文明の受容に積極的でフランス軍の先鋒として反乱の鎮圧に尽くした息子カム・オアイの衣装、およびカム・タイン妻たち二人のもっとも黒タイらしい装束、これらの三態は象徴的である。それまで必要に応じてルアンパバン、ベトナム阮朝、中国清朝に多重朝貢していたムオン・ムアツが、トンキン保護領に組み込まれフランス支配下でどのようにムオンの自律性を保っていくのか模索しなくてはならなかった 1890 年代の政治社会情勢を、そのまま映しているからである。

10 年代記に描かれたカム・オアイ

フランス側が描くカム・オアイ像については「5 節」で紹介した。では、当の黒タイの側はカム・オアイをどのように描いてきたのであろうか。カム・タインが退位して首領に就任したのが 19 歳の 1890 年であり、年代記における彼に関する記述も 1890 年以降の記事が多くを占める。少々長いが、以下に引用する。

ムオン・ラー：ムオン・ブーでは、ボ（Bô）とクット（Khut）の二人が蜂起してバクムオンバクムオンを混乱させ、フィア・ファイン（phia Phanh）とオン・ソーン職（ông xông）〔筆者注：長老会の行政職〕のチョム（Chom）をとらえて弑した。当地の役職者はホアンに奏上した。ホアンはフランスに報告し、兵を率いてボとクットをとらえ、ズア・カー（Dua Cá）すなわちソンラーのカー村で殺した。

この事件のあと、フランスは駐屯地をタブーの船着き場があるダー河縁のパ・ザン（Pá

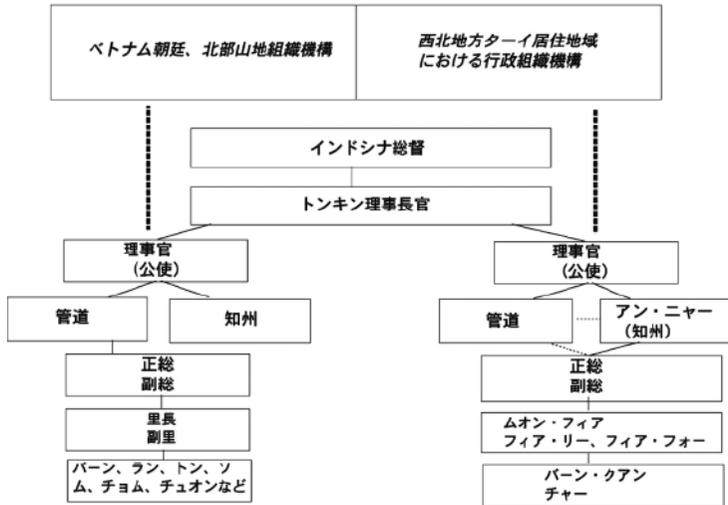


図 1 仏領インドシナ行政組織機構の略図 (檜永 2001: 194)

Giang) へも分けた。そこはヴァン・ブー (Vân Bù) とよばれる。

当時、カム・ヴァン・ホアンは黒タイの九州を統括する「巡撫 (tuần phủ)」に就いた⁹⁾。ムオン・ムアツ知州カム・ヴァン・オアイは、黒タイの管道を兼任した (図 1)。デオ・ヴァン・チは依然として白タイの管道として白タイ各州を統括していた。ムオン・ムオイ知州はバック・カム・チャウ (Bạc Cẩm Châu) からバック・カム・ハック (Bạc Cẩm Hắc) へとかわった。ホアン・ヴァン・カップ (Hoàng Văn Cáp) がムオン・ヴァット知州、サー・ヴァン・カー (Sa Văn Cà) がムオン・サーン知州であった。

1911 年になると、カーイ・カット (Cai Khát) が囚人を先導して蜂起し蹂躪した。かれらは日曜の日中に兵営、理事長、監兵署、ソンラーの金庫を襲撃した、3ヶ月後、彼らはフランスに討ち取られた。この機会にライチャウの囚人も蜂起したがすぐに制圧された。

1914 年になると、ルオン・サム (Lương Xám) による抗仏蜂起がサムヌアで勃発した。モクチャウのハウ・サム (Hầu Xám) もこれに呼応した。この二人は、ターイの地に古くから住む漢族だった。ムオン・チャイ^{フイア}首領をつとめたカム・ヴァン・トゥ (Cẩm Văn Tú) (系図 1) も従った。バック・カム・チャウ (前トゥアンチャウ知州)、ルオン・ヴァン・ノー (Lương Văn Nó) (ムオン・ラム^{フイア}首領) もフランスに逆賊の嫌疑をかけられた。ムオン・ムオイ^{フイア}知州バック・カム・アン (Bạc Cẩm An) はフランスに従って拳兵しルオン・サムをマー河まで追い詰めたが、討たれて死んだ。知に富むカム・ヴァン・オアイとサー・ヴァン・カーは最初、介入することをためらった。その意とは「(自分が) もし漢族なら漢族に従う、もしフランスならフランスに従う」というものだ。漢族の軍はソンラーに攻め入って理事長、監兵署、金庫のあるカウ・カーの丘 (khou Cà) を占領した。彼らは、ブン・ホアン、理事長官、フランス兵を兵舎に包囲して陥れた。フランスはヴァン・ブーから派兵した。オアイはようやくフランスに従うことにした。フランスが砲火でカウ・カー駐屯地の漢族を攻撃する命令を下すと、知に富むオアイは迅速に兵を動かしフランスより先に駐屯地を占領

する大功を上げた。その年が1918年である。カム・ヴァン・トゥはとらえられタイグエン(Thái Nguyên)に追放された。バック・カム・チャウ, ルオン・ヴァン・ノーは殺された。

1918～1922年, 西北地方に住む同胞のメオ〔筆者注:現在の民族呼称はモン(Hmông)〕が頭領ザン・タ・チャイ(Giang Tà Chay)をいただきトゥア・チュア(Tùa Chua)で蜂起した。ディエンビエン(1918年), ロン・ヘ(Long Hè)(1922年)で仏軍は打撃を受けた。メオが蜂起したのは, フランスが一年に3回の年貢を課したからだ。フランスとターイの首領は大損害を受けた。兵を用いて弾圧するのは困難に見えた。フランスは甘言で誘い込み買取する策にでた。ムオン・タインのサム・ムン村(bản Xam Mún)近くの森にある焼畑の出作り小屋で, オアイとチャイは兄弟の契りを結んだ。オアイは「フランスの力はまだまだ強力でまだまだ余力があるから」と, 一次休戦をするようにチャイを諭した。オアイはチャイをたしなめるために, 「私もフランスを討つ意志はあるが, まだ力が足りず時機が来るのを待つしかないのだ」とも言った。チャイは聞き入れ, 手兵をラオスに引き揚げた。この殊勲によりオアイにフランスは北斗四等勲章を授けた(Đặng Nghiêñ Vạn [chủ biên] 1977: 168-173)。

ムオン・ラー(ソンラー)における年代記なので, 1890年代のカム・オアイについてはムオン・ムアツ(マイソン)知州であったこと以上に詳しく書かれていない。しかし1910年代から1920年代の記事には詳しく書かれ, 西北地方各地で起きた抗仏蜂起をフランス軍より巧みに兵を引導して鎮圧し, ときには闘わずして勝つ名将として彼は高い評価をほしいままにしている。

とはいえカム・オアイはひたすら闘将であったのではなく, 上の引用文中にあるようにルオン・サム蜂起の際は初め距離を置こうとしていた。またタ・チャイ蜂起の際も, 敵の頭領タ・チャイと焼畑の出作り小屋で密会し, 実は自分もフランスを討つ時機をうかがっているところだと打ち明けて撤兵を納得させ, 衝突を避けている¹⁰⁾。

このようなムオン・ラーの年代記におけるカム・オアイ像が, 黒タイにとってかなり一般的なものであろう。つまりカム・オアイは悪辣な略奪者に他ならない植民地主義者の手先としての封建領主ではない。あくまで勇敢で武勇と知略に優れた才君であり, むしろムオンの自律性を保つためにやむを得ずフランスに与し, 激動の時代にムオンの安定に尽くした人物として高い評価をもって描かれているのである。

11 19 世紀後半のライチャウ——抗仏から親仏へ

パヴィ資料にある現地文書の話に戻ろう。すでに述べたようにライチャウにおいても現地文字による文書主義は、1890年代には明らかに発生していた。ライチャウにおける文書主義とマイソンにおけるものは、白タイのデオ家と黒タイのカム家の政治的に競合し拮抗する関係を背景に、互いに影響しあって形成されたものであろう。とはいえ管見の限り、その後字体やレイアウトを統一するなど、両者が協同して白タイや黒タイという枠を超えターイとしての文書主義を発展させた痕跡は見あたらない。むしろ両地域の文字は融合より分離の道をたどった。これもやはり、デオ家とカム家のあいだにあった政治的な競合関係ゆえであった。

18～19世紀にかけて雲南から商業・農業移民、鉱山労働者、民間武装集団としてわたった漢族移民集団たちとシップソンチャウタイのタイ族社会の関わり、また清仏戦争を経てシップソンチャウタイがインドシナ連邦の枠組みに包摂される過渡的段階でライチャウ首領デオ家がとった政治行動に関しては、武内（2003; 2010）による漢文とフランス語一次史料の駆使した詳細な研究がある。それらに依拠しながら19世紀後半のライチャウのデオ家の動向を本節「11」で概説し、次節「12」で1880年代から90年代のデオ家とカム家の関係を説明する。

18～19世紀においては大量輸送を可能とする海上交易の発達および平地開発の進展による人口増加があった。こうした南シナ海交易の繁栄と漢族による辺境開発を背景に海域東南アジア世界は発展したが、同じく漢族ネットワークの急速な拡大が見られた雲南からシップソンチャウタイにかけても、さまざまな漢族移民集団を領域経済に取り込むことで在地社会に繁栄がもたらされていた（岡田2012b）。現ライチャウ州から雲南南部にかけてのハニ、白タイなど非漢族が居住する建水県「十五猛」^{ムオン}のうちもっとも強勢を誇ったムオン・ラ（現雲南省金平）の場合、「世襲猛拉土司掌寨印」を授けられ、清朝官員の衣服を授けられていた刀乗鎗が首領であった1870年前後が最盛期であった。当時、ムオン・ラには商業鎮が多く形成され、鉱山開発に数多くの漢族が集まっていた。この時代、すでに非漢族の首領たちは行政、徴税、治安維持に関する一定の権限を与えられ地方を統治していた。一方、金平^{ムオン・ラ}同様に「十五猛」の一つであったライチャウではデオ・ヴァン・セン（Đèo Văn Xeng）、デオ・ヴァン・チ父子が、それに続く1880年代

以降に台頭し始めた。それは彼らが漢族のネットワークによる広域経済活動に基づく地域変動に対応することで地方統治官として自治性の獲得に成功したからにほかならない（武内 2010: 193–195）。武内の研究に詳しいが、ライチャウ首領層は清仏戦争期（1884–1895）には黒旗軍に加わって激しくフランスに対抗していた。しかし雲貴総督であった岑毓英しんいくえいの死（1889年）によって彼らは雲南からの政治的物質的庇護を受けられなくなると、知府職の世襲を含む高度な自治権を獲得することを交換条件としてフランスに投降し、帰順を誓う。その後はむしろ積極的な対仏協力者へと変貌に遂げるが、20世紀に入り、フランスが地方統治への介入とアヘン専売制に代表される交易統制を強化すると、その結果としてムオン・ライ首領の権威は低下していった（武内 2003: 681–683）。

12 ライチャウ首領家族拉致事件（1886年）

デオ家に対してフランスへの投降交渉を行ったのはそもそもバヴィであった。少し遡るが、これにはシャムによるライチャウ首領家族拉致事件（1886年）が絡んでいた。事件の顛末は次の通りである。

清仏戦争終結後の天津条約（1885年）で清朝がベトナムに対する宗主権を放棄して阮朝がフランスの保護国となり、黒旗軍も中国側に撤退すると、シャムのチュラロンコーン王はルアンパバン王国、さらにはルアンパバンと朝貢関係にあったシップソンチャウタイを含むすべての地域をシャム領に併合する方針を打ち出した。チュラロンコーン王〔位 1868–1910〕はスラサックモンتریらを 1886年から 1887年までディエンピエンに駐在させ、清朝の影響力が及ばなくなったシップソンチャウタイの各ムオンに帰順を呼びかけた。このときスラサックモンتریはライチャウ首領デオ・ヴァン・センを召喚したが、老齢を理由にスラサックモンتریの要請を拒絶し、ムコのカム・ドイと3人の息子カム・サム（Cam Sam）、カム・ウイ（Cam Hui）、カム・ラー（Cam La）を代理として派遣した。怒ったスラサックモンتریは彼らを直ちに逮捕拉致し、ルアンパバン経由で鉄鎖につないでバンコクまで連行した。のみならずデオ・ヴァン・センにルアンパバンにまで出頭し完全なる帰順を誓うよう求めた（Deo-Van -Tri 1904: 270; 武内 2003: 675–677）。

シヤムのこの強硬策はシヤムにとって予想外の結末をもたらした。1887年6月、デオ・ヴァン・センの長男デオ・ヴァン・チは中国人武装集団を含む500人の部隊を率いて、バンコクへの人質移送後のルアンパバン王宮を襲撃した。このときに燃えさかる王宮から年老いたウンカム王（位1873–1894）を救出したのがパヴィであった。パヴィへの信頼を深めたウンカム王は、シヤムではなくフランスに帰順することを誓う。のみならずパヴィはその後、シヤムとの外交交渉を通じてライチャウ首領家族の人質を釈放させ、デオ家の信頼も得るのである（武内2003: 679; 菊池2010: 141）。

ちなみにパヴィはバンコクのフランス領事を介してカム・ドイとカム・ウイを釈放させ、自らもハノイ経由で1888年10月にライチャウまで同行したのだが、このカム・ドイこそパヴィ使節団をデオ・ヴァン・チとともにしばしば助け、本論文で取り上げた白タイ文書を作成したルアンチャウ首領である（Deporte 1940: 74）。

この事件に関して黒タイ側はどのような態度をとったのであろうか。ムオン・ムアツの年代記には次のように記されている。武内による訳文の一部に手を加えて引用する。

1887年、ガーイ（ông Ngái）が率いる漢兵がムオン・ムオイに駐屯した。バック・カム・ハック公（Bạc Cẩm Hắc）（筆者注：ムオン・ムオイ首領）は畏れ、ムオン・モン（Mường Mông）首領（筆者注：カム・ドイのこと）とデオ・カム・ソーン（筆者注：マイソン知州）とともにムオン・タイン（ディエンピエン）に走り、シヤムのチャウ・クン（Châu Khun）（筆者注：スラサックモントリー）に伺候することを願った。チャウ・クンは3首領をバンコクに連れ帰った。そこは耐えがたく、3人の首領はシヤムのチャウ・ヴァイ（Châu Vây）に従い、ラオスのムオン・ルオン（ルアンパバン）に戻った（Đặng Nghiêın Vạn [chủ biên] 1977: 161）。

武内（2003: 677–678）が指摘するように、ここにはあたかもトゥアンチャウ首領をはじめとする白タイ、黒タイの首領らが、黒旗軍残党などの漢族武装集団に脅威を感じて自発的にシヤム代表部に接近して庇護を求めたかのように記述されている。また筆者がカム・チョンに「（バンコクは）耐えがたく」の意味を尋ねたところ、「蒸し暑さに耐えられなかったからだ」と答えた。さらに上の引用ではムオン・ムオイ首領バック・カム・ハックもこの「事件」に巻き込まれたことになっ

ているが、ムオン・ムオイの年代記にはこの事件に関連する記載はない（cf. *Cầm Trọng và Cầm Quỳnh* 1960; 樫永 2003）。

黒タイ年代記における事件の扱いは、匪賊としての中国からの武装集団に協力的なデオ氏に対する黒タイ首領たちの強い不満に基づくからであろう。黒タイの人々による不平不満の高まりによってデオ・ヴァン・チはディエンビエンからの撤収を余儀なくされ、同様に彼の弟カム・サムはヴァンイエン府から、義弟カム・ドイはトゥアンザオ州から退かざるを得なかったのである（*Deporte* 1940: 86）。「10節」における引用から関連箇所を要約すると、「ムオン・ラーのカム・ヴァン・ホアンが黒タイ9州を統括する巡撫に就いた1892年、ムオン・ムアツ知州カム・ヴァン・オアイが黒タイの管道を兼任し、いっぽうでデオ・ヴァン・チは依然として白タイの管道として白タイの各州を統括していた」のであり、ここにも、黒タイを白タイと区別する自意識と、黒タイ首領たちによる白タイ首領たちへの対抗意識を読み取ることができる¹¹⁾。

1890年代以降、対仏協力者としての白タイ首領たちと、日和見的にフランスにも協力する黒タイ首領たちは、政治的に互いに牽制し合い、文化の差異化をも志向する。こうした関係性の中で、白タイと黒タイ双方で固有文字を用いた文書主義が発展し、またそれぞれの書体の差異化は進んだのである。なお、いわゆる「分割統治」の一環でフランスは1895年に白タイが多いライチャウ省と黒タイが多いソンラー省にシップソンチャウタイを行政上区分し、デオ氏を黒タイ各州における知州に任命して現地黒タイの反感を煽るといった施策をとった（*McAlister Jr.* 1967: 804–810）。フランスによるこうした統治政策の実施も、白タイと黒タイの文化的差異を大きくした。

13 カム・オアイによる文化運動（20世紀初頭）

黒タイの文字文化について語る前に、カム・オアイの文化政策について語っておこう。カム・オアイが植民地支配下で政治的にどのように立ち回ったかは、本論文「5節」と「10節」ですでに述べた。年代記などにはほとんど記されていないが、カム・オアイは20世紀初頭に一種の文化運動を展開していた。本節では、2006年9月に行ったカム・オアイの直接の孫カム・チョンからの聞き取りに基づ



写真3 ムオン・ムアツ（マイソン）のチエン・ゾンにおけるマイソン首領の館とその家族（Roux 1954: 370）

き、その文化運動の概要を示す。

まずカム・オアイはムオン・ムアツのくに作りの施策として、ムオン中心部の景観を作り替える一種の都市計画を実施した。かつてムオン・ムアツの中心は、平地が狭いケオ村（*bản Kéo*）付近にあった。正確な年代はわからないが1900年前後にカム・オアイは、中心を現在のチエンマイ社付近の盆地に移し、行政の中枢を担う村チエン・ゾン（*chiêng Dong*）を作った。チエン・ゾンには、カム・オアイの館を奥に置き、各支配階層の屋敷が3列に配列された街区が形成された（写真3）。またチエン・ゾンの南には、ムオンの守護霊としての水の精霊がすむ「ムオンの大池（*nong luông*）」を開鑿した。

チエン・ゾンからムアツ川を数百メートル遡った扇状地上流部に、「ムオンの堰（*phai mường*）」としてのチエン・ゾンの堰（*phai chiêng Dong*）を築き、そこから盆地全体を灌漑する水路を引いた。川の左岸にある岩山をムオンの精霊を祀る山「ポム・ミン・ムオン（*pom minh mường*）」に見立て、そこにムオンの中心を象徴する「ムオンの柱（*lác mường*）」を立てた。一方、右岸にはドン・カム（*Đông Cầm*）という禁忌の森がある。チエンから川の下手には、「ファー・パー（*Phá Pa*）」という魚捕りの娯楽的行事の時以外ふだんは立ち入りが禁じられているヴァン・ザム（*vãng dăm*）という淵が開鑿され、その隣にも「ドン・メット（*Đông*

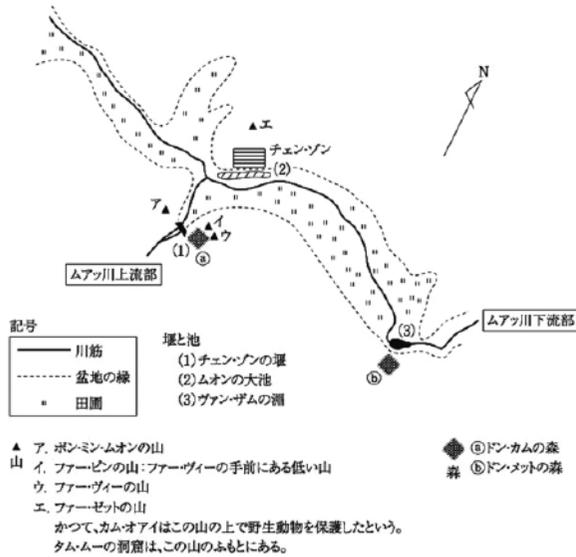


図2 ムオン・ムアツ中心部の空間配置 (樫永 2009: 258)

「Mét）」という禁足地の森があった。ムオンの大池，ムオンの堰，ポム・ミン・ムオンはいずれもムオンの守護霊祭祀を行う聖域である（図2）。ムオン・ムアツ中心部の遷移と，この新しい都市景観の創設には風水の思想が明らかに反映されている。ただし，黒タイの宗教実践と風水の関連については本論文の主題から外れるため他稿に譲る。

くわえてカム・オアイは，カム・タイン没後には「ムオンの大池」の近くにカム・タインを祀る会廟も建てた。会廟はすでに跡形もないが，草葉に埋もれて残る石柱には，上にまず西暦年号を示すアラビア数字で「1903」と刻まれている。さらにその下には3列にわたって年号が刻まれている。右には阮朝年号と西暦年号が「成泰拾五年，西一千九百另三」と漢字で，中央には西暦年号が現地文字で，左には「光緒貳十九年 癸卯五月二十四日立」清朝年号が漢字で刻まれているのである。刻まれた3つの年号は，植民地化するまでの黒タイ首領の多重帰属の状況を示すとともに，政治，外交的に諸文字を使い分け，それぞれの文書主義を發展させようとした痕跡をも示している（樫永 2009: 128）。

カム・オアイは他にも碑文や刻文を残している。チェン・ゾンの裏山にあるタム・ムーの洞窟の壁には，保大5年（1930年）のカム・オアイによるとされる有

名な刻文がある¹²⁾。そこにはムオン・ムアツの『クアム・トー・ムオン』にも記されている内容が、すなわち「景興 40 年 (1779 年), ベトナム王朝からカム・チュア公はラオカイ, カオバン方面にホー族討伐の命を受け挙兵した。その功によってカム・チュア公皇帝の信を得, カム・ニャン・クイ (Cầm Nhan Quý) の名を賜り「果敢將軍」としてマイソン知州に任じられた」ことが刻まれ、^{カム・ニャン・クイ}琴仁貴の功績を顕彰している (樫永 2001: 290)。これは漢文と現地文字それぞれによる刻文であるが、後者の字体については後述する。

カム・オアイには漢文の素養があり、ベトナム語にも秀で、漢越語を用いて黒タイ語で詩も詠じる詩文家であった。西北地方でフランス語とローマ字表記ベトナム語のクオック・グー (quốc ngữ) を用いた初等教育をフランスが開始した 1917 年には、『クアム・ソン・コン (Quăm Sơn Côn)』¹³⁾ という道徳的な慣用句集を編纂して (Cầm Trọng 1978: 469) 西北地方各地に普及させるとともに、識字者による非識字者に対するインフォーマルな現地文字教育を呼びかけた (樫永 2000: 147)。そのほか『ムオン・ラーの話 (Quăm Muồng Là)』, 『ムオン・チエンの話 (Quăm Muồng Chiên)』¹⁴⁾, 数々の歌謡集 (Quăm Khấp Bắc) をカム・オアイは編纂するなどして、この時期に広く黒タイのあいだで字体の統一を推進した。

同じ時期に『三国志』をはじめとする中国およびベトナムの小説類が黒タイ語に多く翻訳され、現地文字による文書の数が増していることも、こうした文化運動との関わりから理解できる。それらの一部はフランス極東学院にも所蔵されている。

さらにカム・チョンによると、カム・オアイは数の単位を「十 (xíp), 百 (hội), 千 (păn), 万 (mín), 十万 (xen), 百万 (lạn), 千万 (cót), 億 (cu), 十億 (mun), 百億 (tu)」と統一して定めたことが『クアム・ホム・ソーン (Quăm Hổm Xôn)』という文書に記述されているというが、残念ながらこの文書は今日まで伝わっていない。

14 20 世紀初頭のムオン・ムアツの文字

カム・オアイによるこうした文化運動の中で、本論文のテーマとの関連からとりわけ重要なのは現地文字の字体に関する部分である。カム・タインの会廟の石

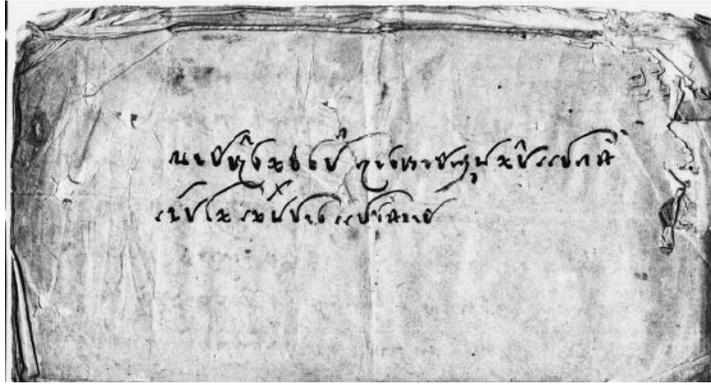


写真4 「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」と題されたカム・オアイの系譜文書（2002年、筆者撮影）

碑にある刻文（1903年）、カム・ニャン・クイに関する記事を刻んだ碑文（1930年）にある黒タイ語を記した字体は、1894年のカム・オアイ書簡の字体と同じである。さらにこの字体は1917年以前に記されたカム・オアイの系譜文書の字体とも同じである。この系譜文書は、「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」（写真4）と題されていて、コウゾ紙8葉を綴じた線装本である（横30cm×縦15cm）。

セン・パーン・パインとは鎮魂儀礼と訳すことができる。そのうち水牛供犠を伴った盛大なムオンの守護霊祭祀の一つがセン・パーン・パイン・クアイである。書写者は当時ムオン・ムアツで高位の宗教役職にあった人物に違いない。「啓定二年二月閏拾八日」の年月日の表し方が年月日の順と漢文方式であるところから、漢文の素養がある知識人であったのだろう。興味深いことに、1894年のカム・オアイによる書簡の日付にある「11月」と同様、「2月」の箇所だけがベトナム語で「tháng hai（2月）」と記されている。

このように、20世紀初頭のムオン・ムアツの支配階層の人々が記したとみられる現地文字の碑文や文書において、書体と表記法の統一性は高い。さらには1894年のカム・オアイの書簡における書体との共通性も高い。しかし異なる点が一点ある。1900年以前のものでは、末子音字によってはその前にある母音符号の読み方が一つとは限らなかったのに対して、それ以降では末子音字がいずれであろうと母音符号の読み方が一つになっているのである。さらにこの新しい表記法は、

すでに述べたように、数々の文書の編纂と外来文献の翻訳などを経て、ムオン・ムアツ以外の地域にまで広く伝えられようとした。カム・オアイはムオン・ムアツの黒タイ語を表記する現地文字の正書法を確立させ、それを 1910 年代に文化運動を通じて他のムオンへも普及し統一することを試みていたのである。

それから 30 年以上後であるが、インドシナ戦争（1946–1954）が終結した翌年、ベトナム民主共和国（北ベトナム）下で西北地方にターイ・メオ自治区（その後「西北自治区」と改称）（1955–1975）が設置された。この民族自治区で、民族語教育実施のためにターイ文字の書体統一作業が行われた。この黒タイ、白タイ、赤タイも含むターイの諸文字を統一する作業で中心的役割を果たしたのが、カム・オアイの実孫カム・チョンを含むマイソンヤソンラーの黒タイ知識人であった。彼らはカム・オアイによる正書法をさらにバージョンアップすることで、表記と音声の一対一対応をさらに実現した「黒タイ文字」を作りあげた。のみならずこの黒タイ文字を基礎として、1961 年に「(改訂) 統一ターイ文字」が制定された（写真 5、6）。

《第 1 系列》			《第 2 系列》		
1.	က	k (က kay45 「類」)	2.	က	k (က kay41 「支える」)
3.	ခ	x (ခ xaw22 「角」)	4.	ခ	x (ခ xing55 「五徳」)
5.	ဝ	ဝ (ဝ uan45 「考える」)	6.	ဝ	ဝ (ဝ uan55 「舵」)
7.	င	င (င caw45 「白鷺」)	8.	င	င (င ci41 「割さす」)
9.	ဆ	ဆ (ဆ sin45 「背負う」)	10.	မ	မ (မ me55 「贈る」)
11.	ဃ	ဃ (ဃ yan21 「草」)	12.	မ	မ (မ yan55 「持ち上げる」)
13.	ဂ	ဂ (ဂ gan21 「鏡」)	14.	ဂ	ဂ (単語例なし)
15.	တ	တ (တ ta45 「蜘蛛」)	15.	တ	တ (တ taan55 「贈る」)
17.	စ	စ (စ tha21 「うきざし」)	18.	ထ	ထ (ထ thap55 「バケツ」)
19.	လ	လ (လ lu22 「鼠」)	20.	လ	လ (လ lu44 「鳥」)
21.	ပ	ပ (ပ pa21 「山羊」)	22.	ပ	ပ (ပ paan55 「女王」)
23.	မ	မ (မ ma22 「魚」)	24.	ပ	ပ (ပ pa55 「山」)
25.	န	န (န nan22 「亀」)	25.	မ	မ (မ ma55 「火」)
27.	မ	မ (မ man22 「犬」)	28.	မ	မ (မ man55 「手」)
29.	ယ	ယ (ယ yan22 「薬」)	30.	ယ	ယ (ယ yan44 「おばあさん」)
31.	လ	လ (လ lan22 「葎」)	32.	လ	လ (လ lan55 「とうもろこし」)
33.	ဝ	ဝ (ဝ wan22 「折輪」)	34.	ဝ	ဝ (ဝ wan55 「扇」)
35.	ဟ	ဟ (ဟ hu22 「耳」)	36.	ဟ	ဟ (ဟ hu55 「輪」)
37.	ေ	ေ (ေ ?an45 「洗面器」)	38.	ေ	ေ (ေ ?an55 「報」)

写真 5 黒タイ文字の各子音字 (佐藤 2001a)

第1系列		第2系列	
1. ɲ	k (kɔ)	2. w	k (kɔ44)
3. ɲy	kh (khiɔ)	4. ɲy	kh (khiɔ44)
5. w	x (xɔ)	6. ɲ	x (xɔ44)
7. ɲɛ	ɟ (ɟɔ ɟɔ)	8. ɲ	ɟ (ɟɔ44)
9. ɲ	c (cɔ)	10. ɲ	c (cɔ44)
11. ɲ	ch (chiɔ)	12. ɲ	ch (chiɔ44)
13. ɲ	s (sɔ)	14. ɲ	s (sɔ44)
15. ɲy	ɲ (ɲɔ ɲɔ)	16. ɲy	ɲ (ɲɔ44)
17. ɲ	d (dɔ)	18. ɲ	d (dɔ44)
19. ɲ	t (tɔ)	20. ɲ	t (tɔ44)
21. ɲ	th (thɔ)	22. ɲ	th (thɔ44)
23. ɲ	n (nɔ nɔ)	24. ɲ	n (nɔ44)
25. ɲ	b (bɔ)	26. ɲ	b (bɔ44)
27. ɲ	p (pɔ)	28. ɲ	p (pɔ44)
29. ɲ	ph (phɔ)	30. ɲ	ph (phɔ44)
31. ɲ	f (fɔ)	32. ɲ	f (fɔ44)
33. ɲ	m (mɔ mɔ)	34. ɲ	m (mɔ44)
35. ɲ	y (yɔ yɔ)	36. ɲ	y (yɔ44)
37. ɲ	l (lɔ lɔ)	38. ɲ	l (lɔ44)
39. ɲ	v (vɔ vɔ)	40. ɲ	v (vɔ44)
41. ɲ	h (hɔ)	42. ɲ	h (hɔ44)
43. ɲ	? (?ɔ)	44. ɲ	? (?ɔ44)

45. ɲ		46. ɲ	
47. ɲ		48. ɲ	

写真6 白タイ文字の各子音字 (佐藤 2001b)

カム・オアイがいなくなったあとの黒タイ社会における文字文化に関する議論は他の拙稿に詳しいので(樫永 2000; 2009), 本論文ではこれ以上深入りしないが, 結論のみ付記しておく, 東南アジア大陸部の植民地分割を背景に1890年代には黒タイ, 白タイの間で現地文字の文書主義が萌芽していたが, それが20世紀に十分に成熟することはなかった。地方行政の末端に至るまで国家文字使用にほぼ一元化されたからである。

15 黒タイ文化の確立

ふたたび1900年代に話は遡る。カム・オアイがムオン・ムアツのくに作りの中で地理的景観を作り替えたことは「13節」で述べた。繰り返せば, 具体的には盆地中央部に立地する行政の中枢を担う中心村の近くに, ムオンの守護霊で水の精でもある竜がすむ「ムオンの大池」があり, その傍らにムオンの中心を象徴する「ムオンの柱」が立つ「ボム・ミン・ムオン」の霊山が発ち, 扇状地上流部に主要灌

漑堰としての「ムオンの堰」が築かれる、という儀礼空間のセットが配置された。

実はこの地理的景観のセットは、ムオン・ムオイ、ムオン・ラー、ムオン・ロといった黒タイの大ムオン中心部に共通していた。このようなムオン・ムアツ以外のムオンにおける景観造りが誰によって、いつなされたのか、つまり黒タイ大ムオン中心部のこうした地理的同型性がいつ、どのように実現したのかについてはまだ詳細が明らかになっていない。とにかく、ここで注目しておくべき点は、中心部が地理的同型であるこれら4つのムオンが年代記『クアム・トー・ムオン』の中でとりわけ重要なムオンとして語られることである。

たとえばムオン・ロは英雄祖先ラン・チュオンが征戦を開始したムオンであり、黒タイの故地とされる。ムオン・ムオイは英雄ロ・レットから約3代の時期が最盛期であった。このことはラオスのサムセンタイ王（在位 1373-1416?）との関わり、および当時の各首領の事績を通して語られている。次にムオン・ラーはカム・ブン・ファインのもとで最盛期を迎えた。ベトナム黎朝の圧政に対して1739年に紅河デルタのソンナム（Son Nam）で蜂起しディエンビエンを拠点として1769年まで黎朝に対抗した^{ホアン・コン・チャット}黄公質（Hoàng Công Chất）に、ちょうどカム・ブン・ファインが追従した時期である。さらにムオン・ムアツは本論文で論じてきたとおり、カム・オアイの時代に「管道」として黒タイ各ムオンを統括する地位に立った。

これら4つのムオンは、いずれも『クアム・トー・ムオン』でラン・チュオンが強力な敵に挑んだ場所ばかりでもある。しかも植民地期において、婚姻と同盟関係によって密につながったカム姓の父系親族らによる支配領域であった。たとえば、カム・オアイの妻はムオン・ラー首領カム・ブン・ホアン [位 1881-1912] の長女であった。また、同じくカム・ホアンの娘カム・ティ・ヴァイン（Cầm Thị Vành）がムオン・ムオイ首領バック・カム・アン（Bạc Cầm An） [位 1914] の妻で、その息子がムオン・ムオイ最後の首領バック・カム・クイ（Bạc Cầm Quý） [位 1920-1945] であった（系図3）。ムオン・ロに関しては、当地の黒タイ首領の地位は18世紀のムオン・ラー大首領カム・ブン・ファインの一族に継承されていた（岡田 2012b: 8-9）。

『クアム・トー・ムオン』で記述の中心に据えられたこれらのムオンが、植民地期において強力な同盟関係にあったカム姓による支配領域であったこと、のみならずラン・チュオンの征戦の経路が現在の黒タイの分布地域とかなり重なってい

16 むすび

CADC のパヴィ収集資料のなかに、シップソンチャウタイの現地文字文書は非常に少ない。しかしそこには、今日までベトナムの村や文書館に伝えられている多くの文書とは異なるジャンルのものがいくつか含まれていた。つまり現地で見える文書の大半を歌謡、物語、暦書などが占めるのに対し、デイゲが 1895 年にその著書の中で紹介した文書と同じく、それらはいずれも 1890 年代に記された行政や通信の文書など、これまで筆者がほとんど目にしたことがないジャンルのものであった。これらは口承性と密に絡み合っていた現地における書承文化の主流とは一線を画している。というのは、ターイ文書に一般的な連続記法ではなく、分かち書きや改行など紙面レイアウト上の工夫があり、また知的活動の観点からいえば、音読から黙読へという変化の萌芽をもそこに明確に看取できるからである。

その頃まで白タイや黒タイの首領たちは清朝、阮朝、ルアンババンに多重朝貢していたが、フランスの進出によって近代官僚制に基づく支配に組み込まれるにしたいが、かれらの間でも外交上すでに浸透していた漢文による文書主義は、フランス語による文書主義によって上書きされた。さらに彼らはムオンの自律性を維持するための戦略の一つとして、現地文字による文書主義を 1890 年代には出現させる。

こうしてライチャウの白タイのデオ家とマイソンの黒タイのカム家それぞれが展開させた現地文字による文書主義は、しかしその後融合して一つのものに発展することはなかった。それは両者の政治的対立関係による。1880 年代には匪賊としての中国からの武装集団に協力的なデオ家と、それに強い不満を抱くカム家の対立がすでにあった。もちろん両家とも最初はフランスの進出に抵抗を示したが 1890 年までにその支配を受け入れた、という点では共通していた。しかしフランスに対する従順な協力者としてのデオ家と、日和見的で消極的な協力者としてのカム家とが互いに牽制しあう関係は、フランスによる白タイと黒タイの分割統治政策とも相まってその後も植民地期を通じて維持される。

20 世紀初頭の状況に関していえば、このようなデオ家とカム家の対立関係の中で、黒タイの各ムオンを統括する立場にあったマイソンのカム・オアイは一種の文化運動を展開した。この運動をとおして黒タイの各ムオンの景観が整備され、

年代記と結びついた社会的な記憶が再編され、現地文字の正書法が制定されて黒タイ文字の原型が作り上げられた。のみならず現地文字による文書量も増大した。まさにこの文化運動を通して黒タイ文字は創成された。黒タイが白タイと民族的に差異化を図る過程で生み出された視覚的道具こそ、白タイのものと明確に差異化された黒タイ独自の文字だったのである。

附 記

本論文は、「付録」も含め、JSPS 科研費 JP21401015（基盤研究 B「メコン河流域地域在り地文書の新開拓と地域史像の再検討—パヴィ調査団文書を中心に」）の助成を受けて実施された成果である。上記科研メンバーであった飯島明子先生、武内房司先生、クリスチャン・ダニエルス先生からの数多く刺激的な助言と激励をいただいた。また査読者の方々からも有益なコメントとご指摘いただいた。そのお礼も申し上げます。

注

- 1) 本論文では、現ベトナムに位置する土地のこの語を含む地名については、ベトナム語および黒タイ語のカタカナ表記の慣例にならい「ムオン」と翻字する。
- 2) A4 版のノートに青色万年筆で筆記され、全 122 頁。うち 117 頁までが 1965 年に記され、残り 5 頁が 1967 年に補足されたことが、本文中に記された署名と日付からわかる。
- 3) カム・チョンによると、イエンチャウの黒タイは死者の靈魂がソンラー省ソンマー（Sông Mã）県チエンクオン（Chiêng Khương）社にあるプー・コン・フオット（*pũ Côn huốt*）の山から天上世界に昇るという観念をもっている。また『クアム・トー・ムオン』にあるラン・チュオンの征戦の経路のなかにイエンチャウは登場しない（樫永 2009: 79）。
- 4) ムオン・ライ首領デオ・ヴァン・チの息子デオ・ヴァン・カン（Deo Van Khang）の申告によると、デオ家の始祖は明代に広西の武官であり文官であったロ・カム・コン（Lo Kam Kong）で、その弟がロ・カム・チュオン（Lo Kam Chiong）であった。この二人がダー河、マー川上流域における住民反乱を鎮圧し、最終的にライチャウをロー・カム・コンが住処とし、いっぽうでディエンビエン（ムオン・テー）をロ・カム・チュオンに住処を定めプー・ラン・チュオンを名乗ったという（Deporte 1940: 67）。このように、ライチャウのデオ氏は広西の漢族に由来するという自分たちの系譜の伝承に、ラン・チュオンを始祖とするロ・カム家とのつながりを巧みに接ぎ木している（武内 2003: 693）。
- 5) 調査は科研「メコン河流域地域在り地文書の新開拓と地域史像の再検討—パヴィ調査団文書を中心に」の助成を受け行われた。
- 6) ペヌカン（Théophile Pennequin）に関する解説に基づく（Association National des Anciens et Amis de l'Indochine et du Souvenir Indochinois）
- 7) デイゲはトンキンにおける軍事作戦に 1884～1886 年、1893～1895 年、1902～1905 年の 3 期にわたって参加した。
- 8) デイゲは 12 州として「ライチャウ、ルアンチャウ、クインニャイ」の白タイ 3 州、「ソンラー、マイソン、イエンチャウ、トゥアンチャウ、トゥアンザオ、ディエンビエンフー」の黒タイ 6 州にフーイエン、モクチャウ、ヴァンチャンを加えている（Diguet 1895: 16-19）。これに対し、ベトナムのターイ研究文献に依拠すると以下のとおりである。18 世紀にはムオン・ラー首領カム・ブン・ファイン（*Cảm Bùn Phan*）によって、この地域から中国雲南省

にかけての土侯国連合がシップホックチャウタイ (*Xíp hốc chau tây*) すなわち「ターイの 16 州」として安定していた。しかし 1885 年の天津条約によって 16 州のうち 6 州が中国領となったため、シップチャウタイ (*Xíp chau tây*) すなわち「ターイの 10 州」となった。だが翌 1896 年には 10 州のうち 2 州が分裂して 12 州、すなわちシップソンチャウタイ (シップソンは 12) になったという。その 12 州とはライチャウ、フォントー、クインニャイ、ソンラー、マイソン、イエンチャウ、トゥアンチャウ、トゥアンザオ、ディエンビエン、フーイエン、モクチャウである (Cầm Trọng và Phan Hữu Đạt 1995: 294–316; Ngô Đức Thịnh và Cầm Trọng 1999: 325)。ただしディゲルによる 12 州とは、ルアンチャウ (Luân Châu) [現ディエンビエン省トゥアンザオ県ムオンムン (Mường Mùn) 社] とするか、フォントーとするかの一点が食い違っている。なお、パヴィー使節団報告書中の地図にも、すでにシップソンチャウタイを示す MUONG SIP SONG CHAU THAIS なる領域名は散見され (cf. Pavie 1911: 53)、1887 年 6 月 27 日の報告には「シップソンチャウタイは疑いなくベトナム王朝に従属している」(Pavie 1911: 112) と記述されている。つまりこれは 1896 年以前の記述であり、シップソンチャウタイという呼称はベトナムのターイ研究が示すよりも古い (樫永 2009: 230)。しかも天津条約の時点で清とトンキンとの国境は依然として線として明確に定まっていなかった。この線を引く作業について検討したのが本論文「付録」である。

- 9) 異本によると、「フィア・ブン・ホアンは壬辰の年 (1892) に巡撫に就任し、カム・ヴァン・アングムオン・ラー知州となった」(Đặng Nghiê n Vạn [chủ biên] 1977: 168) とある。
- 10) もっともこの年代記のベトナム語訳を掲載していた『ターイ社会文化資料』の注釈者は「チャイはほとんどラオス側で活動していたから、この密会は史実ではないだろう」(Đặng Nghiê n Vạn [chủ biên] 1977: 197) と述べている。
- 11) カム・チョンからの聞き取り (2005 年 3 月 2 日) によると、政略結婚でカム・オアイの姉の一人がデオ・ヴァン・チの妻の一人になっている。しかし美貌の誉れが高かった彼女は、周囲からの嫉妬も多く「フィー・フォン (*phi phong*) だ」といわれ、つまり日本的に言えば憑き物がついていてと噂され、ある日ダー河に水死体で浮かぶ変死を遂げた。
- 12) 漢文による全文は次の通りである。「勅枚山州輔導琴仁貴，為以侍奉番臣輔導，破 (= 頗) 有才藝，再上進錢鈔，以資國用，特賜防禦僉事職，可為果敢將軍軍民防禦使司防禦僉事下班。此 勅 景興四十年二月十三日 保大五年三月吉日 佈政琴文威誌」。
- 13) 『ターイの律俗』(Ngô Đức Thịnh và Cầm Trọng 1999) 中に全文が紹介されている。
- 14) カム・チョンによると、チュラロンコーン大学に 1 冊所蔵。

参考文献

〈日本語〉

大黒俊二

2009 「古文学書から史料論へ」齋藤晃編『テキストと人文学——知の土台を解剖する』pp.36–84, 京都：人文書院。

岡田雅志

2012a 「18–19 世紀ベトナム・タイバック地域ターイ (Thai) 族社会の史的研究」大阪大学大学院文学研究科博士学位論文。

2012b 「タイ族ムオン構造再考——18–19 世紀前半のベトナム、ムオン・ロー盆地社会の視点から」『東南アジア研究』50(1): 3–38。

2013 「(書評) 樫永真佐夫『黒タイ年代記「タイ・プー・サック」』(叢書知られざるアジアの言語文化 5) p.163, 東京：雄山閣」『東南アジア研究』50(2): 314–317。

樫永真佐夫

2000 「ベトナムにおける黒タイ語表記の変遷——少数民族の文字文化」『ベトナムの社会と文化』2: 133–178。

2001 「資料：ムオン・ムアツの黒タイ慣習法」『ベトナムの社会と文化』3: 284–351。

2003 「(注釈) クアム・トー・ムオン——ムオン・ムオイの黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』4: 163–243。

樫永 ベトナムにおける黒タイ文字の創成について

- 2007 『東南アジア年代記の世界—黒タイの「クアム・トー・ムオン」』東京：風響社。
2009 『ベトナム黒タイの祖先祭祀—家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。
2011a 「東南アジア少数民族の年代記と歴史研究—ベトナムにおける黒タイ年代記の分析から」『歴史と地理—世界史の研究』226（通巻641）：1-15。
2011b 『黒タイ年代記「タイ・プー・サク」』東京：雄山閣。
2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」—村のくらしと恋』東京：雄山閣。
樫永真佐夫／カム・チョン
2007 『ベトナムの黒タイ首領一族の系譜文書』（国立民族学博物館調査報告70号）大阪：国立民族学博物館。
菊池陽子
2010 『「ラオス」をつくった男—パヴィ』菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編著『ラオスを知るための60章』pp.140-144, 東京：明石書店。
佐藤博史
2001a 「黒タイ文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著『言語学大事典別巻 世界文字辞典』pp.391-393, 東京：三省堂。
2001b 「白タイ文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著『言語学大事典別巻 世界文字辞典』pp.515-517, 東京：三省堂。
シャルチエ, R.
1996 『書物の秩序』（ちくま学芸文庫）長谷川輝夫訳, 東京：筑摩書房。（Roger Chartier, 1992, *L'Ordre des livres: Lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XVII^e et XVIII^e siècle*. Aix-en-Provence: Alinea）
武内房司
2003 「デオヴァンチとその周辺—シブソンチャウタイ・タイ族領主層と清仏戦争」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周辺地域の歴史と現在』pp.645-708, 東京：風響社。
2010 「地方官と辺疆行政—十九世紀前半期, 中国雲南・ベトナム西北辺疆社会を中心に」山本英史編『近世の海域世界と地方統治』（東アジア海域叢書）pp.171-201, 東京：汲古書院。
ダニエルズ, C.
2002 「東南アジアと東アジアの境界—タイ文化圏の歴史から」中見立夫編『境界を越えて—東アジアの周辺から』（アジア理解講座1）pp.137-189, 東京：山川出版社。
2004 「タイ族は国王の系譜をかく描けり—広西における漢族と非漢族の間」『アジア遊学』（特集：族譜—家系と伝説）67: 52-71。
三瀬利之
2009 「近代官僚制の文書主義—文書機能論から見たその合理性」齋藤晃編著『テキストと人文学—知の土台を解剖する』pp.264-283, 京都：人文書院。

〈外国語〉

- Association National des Anciens et Amis de l'Indochine et du Souvenir Indochinois
Le général Pennequin (1849-1916)
http://www.anai-asso.org/NET/document/mission_et_conquete/conquete/pennequin/index.htm（最終閲覧2020年3月22日）
Cầm Trọng
1978 *Người Thái ở Tây Bắc Việt Nam*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
Cầm Trọng và Cầm Quỳnh
1960 *Quả Tổ Mườn (Kể chuyện bản mường)*. Hà Nội: Nhà xuất bản Sư học.
Cầm Trọng và Phan Hữu Đạt
1995 *Văn hoá Thái Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá Dân tộc.
Đặng Nghiễn Vạn và Cầm Trọng
2002 Niên biểu thủ lĩnh Thái ở Tây Bắc (các châu mường chính), Chương trình Thái học Việt Nam [biên soạn], *Văn hoá và lịch sử các dân tộc trong nhóm ngôn ngữ Thái Việt Nam - Kỳ yếu Hội nghị Thái học Việt Nam, lần thứ III tại Hà Nội*, tr.161-171. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá

- Thông tin.
 Đặng Nghiêın Vãn[chủ biên], Cầm Trọng, Khả Văn Kiếın, Tồng Kim Ân
 1977 *Tư liệu về lịch sử xã hội dân tộc Thái*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Daniels, C.
 2009 Script as the Narrator: Oral Tradition and Literacy in Tay Maaw Chronicles. In M. Kashinaga (ed.) *Written Cultures in Mainland Southeast Asia* (Senri Ethnological Studies 74), pp. 173–192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Deo-Van-Tri
 1904 Mémoires de Deo-Van-Tri. *Revue Indochinoise* 1904–2: 256–275.
- Deporte (Capitaine)
 1940 Les origins dela famille de Dèo-van-tri. *Bulletin des Amis du Laos* 4: 65–94.
- Diguet, E.
 1895 *Étude de la langue taï*. Hanoi: F. -H. Schneider.
- Hoàng Trần Nghịch
 1998 Nổi vãn vương về kho sách chữ Thái cổ, Hội vãn nghộ dân gian Việt Nam[biên soạn], *Giữ gìn và phá huy tài sản văn hoá các dân tộc ở Tây Bắc và Tây Nguyên*. Trang 188–194. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Hoàng Trần Nghịch và Tồng Kim Ân[biên soạn]
 1990 *Tư Điển Thái – Việt*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Kashinaga M.
 2009 Introduction. In M. Kashinaga (ed.) *Written Cultures in Mainland Southeast Asia* (Senri Ethnological Studies 74), pp. 1–14. Osaka: National Museum of Ethnology.
- McAlister, J. T., Jr.
 1967 Mountain Minorities and the Viet Minh: A Key to The Indochina War. In P. Kunstadter(ed.) *Southeast Asian Tribes, Minorities and Nations*, pp.771–846. New Jersey: Princeton University Press.
- Ngô Đức Thịnh và Cầm Trọng
 1999 Luật tục Thái Việt Nam (tập quán pháp) . Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá dân tộc.
- Pavie, A.
 1906 Mission Pavie: Indo-chine 1879–1895, Géographie et voyages II. Exposé des travaux de la mission (troisième st quatrième périodes = 1889 à 1895) . Paris: Ernest Leroux.
 1908 Préface, dans E. Diguet *Les montagnards du Tonkin*, pp. v-xv. Paris: Augustin Challamel.
 1911 *Mission Pavie: Indo-chine 1879–1895. Géographie et voyages VI Passage du Mé-khong au Tonkin (1887 et 1888)*. Paris: Ernest Leroux.
- Roux, H.
 1954 Quelques minorités ethniques du Nord-indochine. *France-Asie* 94–95: 370.
- Saenger, P.
 1997 *Space between Words: The Origin of Silent Reading*. Standord: Stanford University Press.
- Tạp chí Dân tộc học (biên soạn)
 1980 Danh mục các thành phần dân tộc Việt Nam. *Tạp chí Dân tộc học số* 1980 (1): 78–83.
- Thongchai Winichakul
 1994 *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Yukti Mukdawijitra
 2011 Language Ideologies of Ethnic Orthography in a Multilingual State: The Case of Ethnic Thái Orthographies in Vietnam. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 4–2: 93–119.

付録：東南アジア大陸部における国境の画定と現地文字 — ムオンテ、ムオンブムの白タイ文字資料をめぐって

1 国境線の引きかた

東南アジア大陸部の国境はどのように画定されたのであろうか。1890年代の紅^{ホン}河支流ダー河上流域における中越国境地域の例に基づき、そのミクロな詳細をここに提示する。

この地域には前近代までベトナム、中国、ラオスなどへ同時に多重朝貢することでそれらいずれの国家からも高い自律性を保った小規模な首領国が分立していた。ベトナムを植民地化したフランスと中国清朝が、この地域に国境線を引くにあたってまず重視したのは、それぞれの首領国が「本当は」どこに服属しているのかをはっきりさせることであった。その際、現地文字でも記された文書があれば、それが根拠資料となり得る。しかし、きわめて多種の文字が確認できる東南アジア大陸部において、それぞれの現地文字の読み書きに精通する者は現地でも限られていて、国境画定の根拠資料とするには、国境分割の事実上の担当者であった大国の言語へまず翻訳することが不可欠であった。

分析の対象とするのは、筆者が CADC 所蔵「Papiers d'Agents archives privées」に含まれる「Pavie コレクション」中の「Pavie57」から見つけ出した、ダー河上流域において中国とベトナムの国境を画定する際に用いられたと思われる根拠資料である。以下で、現地文字で記されたそれらを紹介し、それが国境画定にどのように活用されたのかを明らかにする。より具体的には、フランスと中国清朝との間で、現在のベトナムライチャウ省と中国雲南省の国境を画定するに際して、現地首領国の首領たちによる現地文字文書が、その根拠資料とするために、どのようにフランス語に翻訳されたのかを検討する。結論を先取りしていえば、ここには植民地の拡大を目指すフランスの政治的意図が現地文字の翻訳にも反映されているのである。

2 国境画定の根拠文書

現在のベトナム、ライチャウ省ムオンテ県に属するムオンテ、ムオンブムで、1895年にパヴィイ使節団がそれぞれの首領たちから入手したらしい白タイ語文書が

ある¹⁾。これらの文書が作成され、パヴィ使節団が入手した経緯を、パヴィ使節団の報告書にある記述に即して以下に述べる。

紅河上流域からメコン上流部への国境線は、1890年代に入っても中国と仏領インドシナの間でまだ画定されていなかった。そこで1894年1月6日、フランス首相と外務大臣はパヴィにその地域の国境画定の任を授けた。というのも、紅河左岸における中国との国境はほぼ画定されていたとはいえ、紅河右岸のダー川上流域の国境を画定する工作は停止を余儀なくされていたからである。また、中国との協定調書に添付された地図上の誤りを1887年に中国側から指摘されていたし、ムオンライ（ライチャウ [萊州]）首領デオ・ヴァン・チの領域境界をめぐる問題を抱えていたからである。実は1891年にはパヴィがこの地域を測量し、セルヴィエール大佐（colonel Servière）の指示により国境付近の諸首領国の帰属についてはすでに調査していたが、両国間の決定には至っていなかった。デオ・ヴァン・チの抗議にもかかわらず、中国側がムオンモ、ムオンブム、ムオンテに対する領有を強く主張し続けていたからである（Pavie 1906: 301-302）。

ここに記された「デオ・ヴァン・チの領域境界をめぐる問題」とは、次のような当時の政治情勢のことであろう。ムオンライ首領デオ・ヴァン・センやその息子デオ・ヴァン・チは、1887年にはホー族らとルアンパバンを襲撃するなどしてフランスに対抗していた。しかし、1889年に清朝雲貴総督であった^{しんいくえい}岑毓英の死によってその政治的・物質的庇護が受けられなくなると、ムオンライ（ライチャウ）における「知府」職を世襲し高度な自治権を獲得するなどの条件と引き替えに、1890年デオ・ヴァン・チはフランスに投降した（武内 2003: 681-683）。以来、デオ・ヴァン・チはそれまでどうって変わって親仏地方官僚に転じた。しかし、ムオンライよりダー川上流にあるムオンモ、ムオンブム、ムオンテの首領たちがムオンライに帰属するのかどうかについては、中国との間でまだ決着がついていなかった。

1895年、パヴィ使節団はムオンモ、ムオンブム、ムオンテを訪問し、現地首領たちがかつてどこに貢納し、納税してきたかを調査した²⁾。この調査で現地首領たちから得た回答書が、中国の国境画定委員に提示すべき必要な根拠書類であった。ムオンテとムオンブムの白タイ文字文書とそのフランス語訳の文書を³⁾、以下に対照させて提示する。

だが、その前に地名に関わる重要なことを一つ付記しておく必要がある。端的に言えば、当時のムオンテの位置と現在のムオンテの位置が地理的に異なってい



地図1 現ライチャウ省（『ベトナム 63 省行政地図』（Nxb Tài nguyên-môi trường và bản đồ Việt Nam (biên soạn) 2011) の地図に加筆）

ることである。かつてのムオンテは、現在のムオンテよりダー河上流に位置し、現在のムオンテ県ムオンテ社付近である。では現在のムオンテ県人民委員会があるムオンテ市鎮はかつてのどこにあたるのだろうか。それこそがかつてのムオンブム中心部にあたるのである。つまり現在のベトナムにおける行政区画からはムオンブムの地名は消えてしまっている。また、当時ダー河の下手から順に、ムオンモ、ムオンブム、ムオンテとならんでいた3つの中で、ムオンブムが最も有力な首領国であった（地図1）。

3 フランス語訳の記述

これらの文書でムオンブムとムオンテの首領たちは、それまでどこに貢納してきたのかを過去に遡って報告している。まずムオンテ首領による報告のフランス語に翻訳された全文を紹介する。

われわれムオンテの役職者と村長は、2月10日に挨拶にやってきました。しかし、フランス首長が中国とアンナンの国境画定を担当しています。われわれが訊かれましたのは、われわれがどの局に従っていて、誰に税を払うかです。

われわれは以下のとおり記します。

ムオンテの領域は3、4代前より、ライの州に従属しています。ライの首領に対して、こ

の頃から我々は税を払っています。我々は他の首領を知りません。

その前は、われわれはルアンパバンに税を3年ごとに払っていました。中国に決して払っていません。それより前に関する情報を、われわれは一切もっておりません。

全文の下に、首領らの書名が付されているのだが、ムオンブム首領らによる文書の訳文もおなじ形式で書かれ、しかも内容もほぼ同じである。

われわれムオンブムの役職者と村長は、フランス首長たちに以下のことを報告にまいりました。ムオンブムのくには3、4代前より、ライの首領たちに3、4年ごとに定期的に税を払ってきました。

その前は、われわれはルアンパバンに税を3年ごとに払っていました。
中国に対して貢納や納税をしたことはありません。

いずれの文書でも、ベトナム阮朝の興化省に属するムオンライに現在は服属し、かつてはルアンパバンに朝貢していたが、中国に納税したことはないことを現地首領たちは強調している。

4 白タイ文字による原文の記述

筆者は白タイ文字による原本を読んだ。すると驚いたことに、その内容はフランス語訳と正確に対応していなかった。まず、ムオンテ首領の回答の全文(図版4)を日本語に訳してみよう。

われわれムオンテ首領および役職者は、2月11日フランスの大官にご挨拶に伺いました。拝謁の日は、大官がムオンテに到着した当日でした。われわれが土地を実際にどのように分けて掌握しているかを話しました。大官がお尋ねになったのは、インドシナの地に属する各村にあるわれわれが税をどのように納めてきたか、またその場合、われわれがどこかに参内していたかどうかです。このムオンテの地の昔について知っていることを、われわれは語りました。4、5代前までははっきりしていて、ムオンライ首領にのみ拝謁にうかがっていました。われわれがムオンライ首領に税を納めに伺いましたが、ほかのどこかに属していたかどうか、はっきりしません。4、5代前以前に遡って語ると、ルアンパバンに3年出向くいっぽうで、中国には1年出向くと2年は拝謁にうかがいませんでした。さらに昔の中国に対しては、はっきりしません。たしかなことは、ムオンライ首領だけを頼ってきたことです。われわれの側が訪問しました。

この全文の右下に、ムオンテ首領と役職者らの署名があり、「成泰七年二月十一

日」としてベトナム阮朝年号による日付がある。陽暦 1895 年 3 月 7 日にあたる。いっぽう、ムオンブム首領による回答の全文（図版 5）は以下の通りである。

われわれムオンブムの長が、すべての役職者に謹んで申し上げます。われわれはフランスの大官に拝謁し、この 3、4 世代のわれわれのくに全体の生活を、はっきりお知らせしました。われわれは毎年、儀礼と食料のための資金をムオンライ首領に拠出し、3、4 世代にわたって、われわれはムオンライに伺候し、出向き、訪ねてきました。3、4 世代より以前については、ルアンパバンに 3 年出向くと、1 年は中国にも出向きましたが 2 年は税や食料を納めませんでした。

やはり、この全文の右下にムオンブム首領と役職者らの署名があり、「成泰七年二月四日」とベトナム阮朝年号による日付がある。ムオンテを訪ねる一週間前である。

ムオンテとムオンブムの首領と役職者らによる回答は、いずれも内容が似通っている。要点の一つはまず、この数十年はムオンライのみに貢納し納税してきたことである。次に、その前はルアンパバンには毎年貢納したが、中国清朝に対しては 3 年に一度のみの貢納であったことである。

このように、これら原本の内容は先に紹介したフランス語版に対応していない。フランス語版にあるように、数世代前まで 3 年ごとにルアンパバンに貢納していたのではない。ルアンパバンには毎年貢納していたのに対して、中国に 3 年ごとに貢納していたと原本は記しているのである。さらにもっと重要な点は、フランス語訳ではムオンテ、ムオンボムの首領たちは、過去から現在にいたるまで中国に貢納や納税をしたことがないとされているのに対して、原本には数世代前まで中国に 3 年に一度貢納していたと記されているのである。

フランス語版と原文の間にあるこの内容の齟齬は、おそらく意図的なものであろう。とくにムオンテ、ムオンブムの首領たちが過去に中国に貢納していたという記述はフランス語訳では抹消されるべきであった。その方が仏領インドシナ側に両首領国を帰属させるのに好都合だったからであろう。

5 白タイ文字文書が語ること

ここでは、パヴィ使節団が本国に持ち帰った資料群のうち、ムオンテとムオン

ボムで 1895 年に記された白タイ文字による現地資料を分析したが、その資料群には、白タイ文字の他にもシャン文字、ラオ文字などさまざまな文字で記された現地文書が多数含まれている。これら一次資料を分析し、既刊のパヴィ報告書における記述と対照させることで、東南アジア大陸部の国境画定がどのように行われたのか、つまり具体的には 19 世紀に東南アジアをイギリス、フランス、中国といった大国が分割し、国境線を引く過程で、現地の在地首領たちがどのように政治的に立ち回ってきたのか、またそこに大国がどのように関与したのかについて、歴史的考察を深めることができる。

筆者の関心に引きつけていえば、ここで取り上げた白タイ文字文書は、白タイ社会における固有の文字文化を考えるうえで非常に興味深い。たとえば、ここに白タイ文字による公文書における書式の発展が看取できることである。この文書に句読点や改行は使われていないが、ムオンブムの原本など「謹んで申し上げます (*khhoi chắc dam mĩ san chheng sú...*)」といった紋切り型の定型句で始まっている。さらに、いずれの文書も最後は改行して、左右に日付と署名を記載するなど、行政文書としてのレイアウトと形式の統一がすでにできあがっているのである。

このような実務文書における書式の定型化は、19 世紀末の白タイの文字文化について次の重要な点を示唆している。たとえば現在まで伝わっている白タイ文字文書は大部分を歌謡、文学、祈祷書が占めていて、行政や商業に関わる文書は非常に珍しいのであるが、この書式の定型化は、現地首領を頂点とする官僚制の中で役人同士の間で一定量の実務文書が取り交わされていたことを証明している。つまり 1990 年代に筆者は古老らから、「1945 年に成立したベトナム民主共和国のもとで、それ以前の現地文字による実務文書が、人民を抑圧する封建主義的な前近代の遺物として党によって批判され、1960 年代までに大量に廃棄焼却された」という話を聞いたものであるが、それが事実であったことをも雄弁に証しているのである。

注

- 1) これらの史料は、そのフランス語訳とともに、エクサンプロヴァンスにあるフランス国立文書館海外館（以下、ANOM と略記）と CADC に、パヴィ使節団関連資料として収蔵されていて、閲覧可能である。ANOM のものは、コーティングされた薄い絹の布に白タイ文字で記され押印があるのに対して、CADC のものは罫線がある洋紙ノートに書かれていて押印が

- ない。ANOM 所蔵のものが正本で、CADC のものが副本だろう。
- 2) この調査については、刊行されたパヴィ使節団の報告書 (Pavie 1906) に記されていない。
 - 3) ANOM と CADC でムオンブムとムオンテの首領らによる回答文書は確認できたが、ムオンモ首領による回答文書はない。CADC に保管されているパヴィ使節団が残した「Pavie57」のノートの中に、ムオンモ首領に会ったという記述が見当たらないので、ムオンモ首領による回答文書はもともとないであろう。ムオンモはムオンライに隣接し、ムオンモの北縁はムオンブムの一部フアブムに接している。だから、当時の国境問題に直接関わるとすればフアブムがあるムオンブムなので、ムオンモ首領の報告は不必要と結論されたのではないだろうか。

参考文献

武内房司

- 2003 「デオヴァンチとその周辺——シブソンチャウタイ・タイ族領主層と清仏戦争」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』pp.645–708, 東京：風響社。

Nxb Tài nguyên-môi trường và bản đồ Việt Nam (biên soạn)

- 2011 *Việt Nam Administrative Atlas (Tập bản đồ hành chính Việt Nam 63 tỉnh, thành phố)*. Hà Nội: Nxb Tài nguyên-môi trường và bản đồ Việt Nam

Pavie, A.

- 1906 *Mission Pavie: Indo-chine 1879–1895, Géographie et voyages II. Exposé des travaux de la mission (troisième et quatrième périodes=1889 à 1895)*. Paris: Ernest Leroux